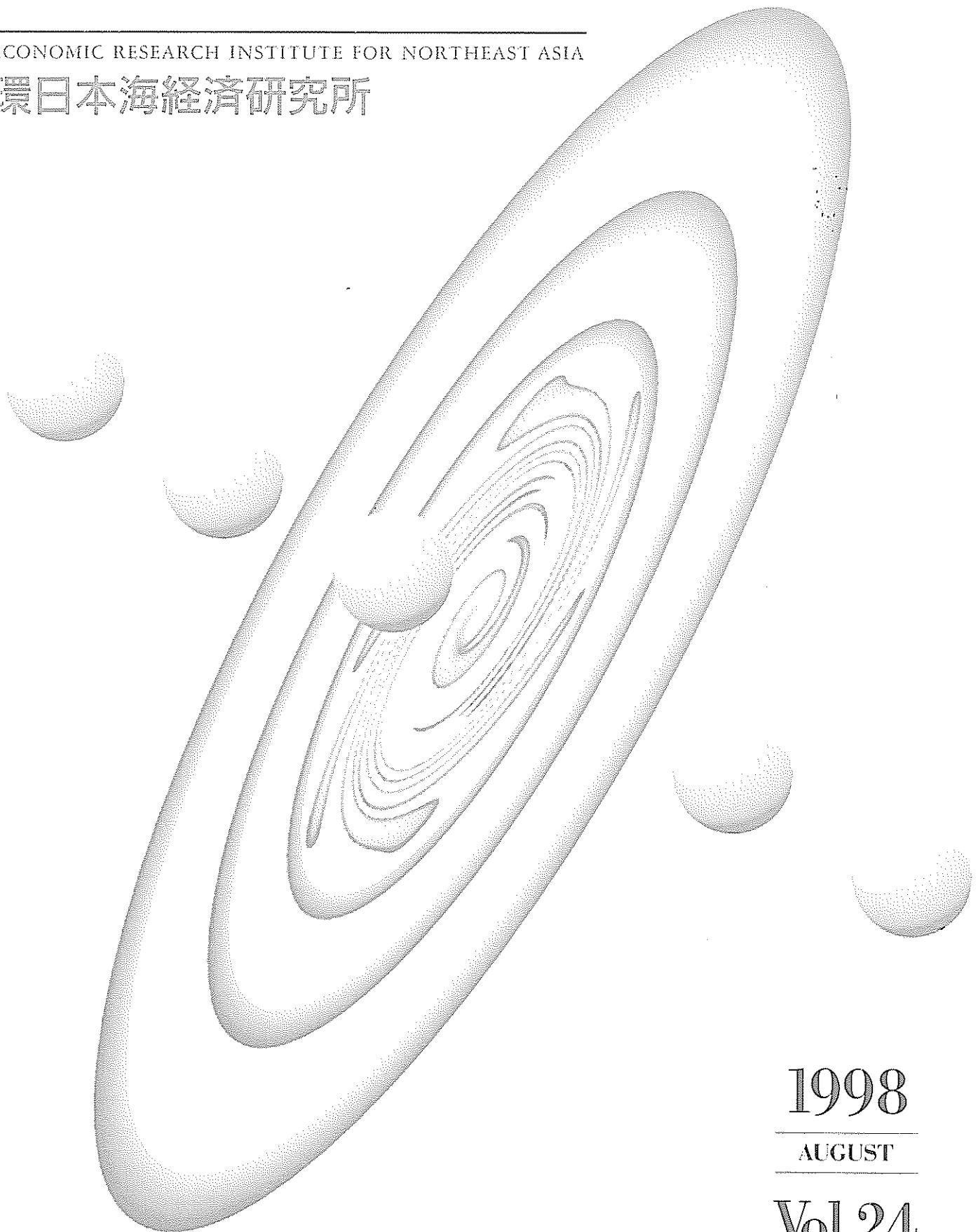


ERINA REPORT

ECONOMIC RESEARCH INSTITUTE FOR NORTHEAST ASIA

環日本海経済研究所



1998

AUGUST

Vol.24

目 次

■ 21世紀の北東アジア－2025年の所得水準と経済規模：マクロフレームワーク試算（日／英抄訳） Northeast Asia in the 21st Century - Per Capita Income and the Real Scale of the Economy in the year 2025: As a Macro-Economic Framework (Summary)	
.....ERINA副理事長・所長 宮戸 駿太郎	
ERINA調査研究部研究員 浜田 充	1
Shuntaro Shishido, Deputy Chairman of the Board of Trustees and Director, ERINA	
Mitsuru Hamada, Researcher, Research Division, ERINA	
■ ロシア経済－1998年夏（日／英抄訳） The Russian Economy - Summer 1998 (Summary)	
.....横浜市立大学名誉教授 佐藤 経明	8
Tsuneaki Sato, Professor Emeritus of Economics, Yokohama City University	
■ 極東ロシアと日本の間の善隣関係の一層の発展に向けて（日／英抄訳） Far Eastern Russia and Japan: Prospects for a Good Neighborhood (Summary)	
.....ハバロフスク地方知事 ビクトル・I・イシャーエフ	16
Viktor I. Ishaev, The Head of Administration of the Khabarovskiy Krai, The Chairman of the Council of the Interregional Association of Economic Cooperation “Far East and Zabaikalie”	
■ 韓国経済の再跳躍（日／英抄訳） Outlook for the Recovery of the Korean Economy (Summary)	
.....韓国開発研究院 前副院長 嶽 峰 成	20
Bongsung Oum, Former Vice President, Korean Development Institute	
■ 羅津－先鋒経済貿易地帯の開発とその特徴朝鮮社会科学院 世界経済南北協力研究所 所長 李 幸 浩	25
■ 1997年の中国及び東北三省の経済概況ERINA調査研究部 研究員 川村 和美	30
■ 経済交流部だより 中国吉林省地域総合計画調査の概要と開発・投資セミナーERINA経済交流部 部長代理 中村 俊彦	40
■ 研究所だより	42

21世紀の北東アジア

－2025年の所得水準と経済規模：マクロフレームワーク試算

ERINA副理事長・所長 宮戸駿太郎
ERINA調査研究部研究員 浜田 充

環日本海経済研究所は1993年発足以来、中国東北部、朝鮮半島、極東ロシア、モンゴル等の北東アジア経済圏の未来像について研究を行ってきたが、このたびその基本となる2025年の経済規模、一人当所得、人口、などの経済指標についての試算結果をとりまとめた。これは今後注目される図們江地域の総合開発、極東シベリアのエネルギー・輸送システム開発、など各種の大規模プロジェクトの将来展望評価のための基礎となるマクロ経済社会上のフレームワークであり、環日本海の経済交流と展望のための基本的指針として役立つことを目標としている。この予測シミュレーションに用いた各国と各地域別の需給両サイドのデュアルなマクロモデルは上記の報告書の補論に紹介されている。いまこの報告書の主要な知見と提言を要約すると以下の通りである。(なおこの予測に当っては、世界の主要な国際機関（国連、OECD、世界銀行など）による最新の予測結果も参考として用いられている。)

1. GDP等の国際比較の尺度として、今回は変動幅の多い為替レートによる表示方式を避け、実質的な購買力平価を用いたため、中国は約5倍、ロシア、韓国は2倍ないし1.3となり、日本は逆に3割方減少となっている。また日本とアメリカは参考までにOECDの長期予測の平均値を用いている。

2. 2025年までの北東アジア関係諸国経済の展望を上限と下限の幅で予測しているが、経済力の規模では中国が米国を抜き、第1位の座を占め、日本は米国に次ぐ第3位に低下する。(第1表)

3. 一人当所得水準では韓国が第1位となる可能性が大きい。即ち韓国が現在の混迷を早期に克服し、5ないし6%の経済成長をさらに持続できれば、2025年には米国と日本の水準を抜く可能性がある。(第1図A)

また韓国は経済力の全体規模でもロシアに迫り、日本との格差でも現在の4分の1の格差から6割前後の格差にまで接近する。(第1図B)

4. ロシアは不確定要因が極めて大きく、低迷が続ければ4%台、その潜在成長力が發揮できれば6%台の成長が可能であろう。極東ロシアはロシア全土の成長に鋭敏に反応するから、潜在的な成長の可能性は比較的大きい。この点、現在のロシア政府見通による極東ロシアに関する展望は2005年までであるが、人口の一層の低下と極めてゆるやかな経済成長とを見込んでいる。しかし、超長期的にみると経済は好転する可能性が大きい。なお日・ロの経済力格差は、現在の約4割から、2025年には6ないし10割にまで接近する可能性も予想される。

5. 中国を東北三省、ロシアを極東ロシア、のみに限定し、これに韓国と北朝鮮とモンゴルを含めた5地域合計としての北東アジア経済圏は、2025年には人口規模で現在の18億人から22億人となり、2割強の増加となる。経済力では5~7兆ドル、と日本の経済をやや上回る可能性も考えられる。いずれにせよ、日本経済と北東アジア経済圏とは経済力ではほぼ拮抗し、一人当所得格差も現在の約3割から6ないし9割にまで接近する。(第2表)

6. 一人当所得格差のこのような劇的な縮小は、相互間の地域交流の増大、とくに貿易面ではヨーロッパ型の水平分業圏の到来が予想される。この水平分業の活性化は物のみでなく人間と資本の往来も大幅に促進することが予想される。この傾向は予測期間の前期の2010年頃を転機として一段と加速しよう。

7. 環日本海をめぐる大経済圏の出現は、地球環境上の負荷を著しく高める結果となる。大気、水質、廃棄物、自然破壊などに対処するためのクリーンな技術開発は著しい進展が期待されるが、このためのGDPの支出比率はかなりの上昇が予想される。

8. 日本経済の成長は、OECD予測では平均2.3%前後(ただし2010年以後は1.8%)に止まるがその地域構造とくに

経済集積と人口構造の変化は今後加速すると思われる。とくに注目すべきことは、明治以降歴史的に低下を続けた日本海沿岸の10道府県の人口のシェアは今後一転して上昇に転ずる可能性が大きいことである。過去100年にまたがる国際的なグラビティー・モデル（上記報告書参照）によると上記の北東アジア経済圏の出現と交流の活性化を通じて人口のシェアは現在の13%から20%前後へと上昇する可能性を示唆している。このような日本列島の「北東アジアシフト」はこれから確実に進行し、太平洋沿岸から日本海沿岸への人口移動の逆流傾向が定着化するであろう。（第2図）

9. 日本経済への政策提言としては、このような人口移動の新しい趨勢をふまえて国内向けと対岸諸国向けの両者を一体的な長期戦略として組立て、これを積極的に実行していくことが望ましい。

- a. まず国内向けでは、公共投資の「北東アジアシフト」の一環として日本海国土軸となる高速交通体系の推進、エネルギー輸送システム、対岸諸国との航空路ネットワークの強化、環境関連投資と技術開発、関連の金融基地と物流ネットワークの強化などが注目すべき「柱」となろう。
- b. 一方対岸向けの長期戦略プロジェクトでは、図們江総合開発、中・ロによるユーラシア大陸横断輸送システム、極東の資源・エネルギー開発、朝鮮半島

の南北交通システム、各種のテクノポリス拠点地域開発、など誘発効果の高い投資プロジェクトの群生が予想される。わが国は現在および今後予想される過剰貯蓄をこれらの国際開発に積極的に投じて行くことが必要で、これらは同時に溢出効果（スピルオーバー・エフェクト）となって日本海沿岸地域の活性化にも強力にはね返る可能性が大きい。

c. これら長期戦略を構想し有効に実現するためには関係国間である政府レベルの協力体制も不可欠で、このことが近い将来の最重要課題となることは明かである。とくにAPECのサブシステムとしての北東アジア協力機構や公的資金を柱とする北東アジア開発基金の創設など早晚に解決を迫られる課題となるだろう。

参考文献

1. アンガス・マディソン、金森久雄監訳「20世紀の世界経済」（東洋経済新報社、1992年）
2. OECD 「The World in 2020 - Towards a New Global Age」 1997年
3. 動環日本海経済研究所編集「ロシア極東ザバイカル地域長期発展プログラム」（大蔵省印刷局、1997年）
4. Richardson, Pete (ed) 「Globalization and Linkages: Macro-Structural Challenges and Opportunities」 (OECD Working Papers No 181, 1997年)

Northeast Asia in the 21st Century - Per Capita Income and the Real Scale of the Economy in the year 2025 : As a Macro-Economic Framework (Summary)

Shuntaro Shishido

Deputy Chairman of the Board of Trustees and Director, ERINA

Mitsuru Hamada

Researcher, Research Division, ERINA

The Economic Research Institute for Northeast Asia (ERINA) completed its project on long-term projection (1995-2025) for Northeast Asian countries and areas and published its first report in March 1998. The report describes likely growth patterns of Northeast Asian countries with upper and lower rates of growth, including population, per capita income, real GDP, capital stock, employment, private and public consumption, external trade, etc.

The areas covered are China and its three northeast provinces, North and South Korea, Russia and its Far

East, and Mongolia.

Two simplified dual macro models with supply-side capacity and aggregative demand-side variables for each country were used for simulation analysis. Upper growth rates are projected as simple extrapolation mainly based upon production function with a technical progress variable. Lower growth rates are projected after a lower adjustment of technical progress and fixed investment behavior with capital stock adjustment.

At the end of the report is presented an international gravity model simulation with respect to Japan's popula-

tion structure

All the results of the model forecast are presented in terms of both dollar value and PPP estimates at 1990 prices

Table 1 shows GDP and per capita GDP in terms of 1990 dollar and PPP. In terms of PPP, China ranks first in total GDP and Korea in per capita GDP in 2025

Figure 1A and 1B show per capita GDP and GDP in PPP for 5 Northeast Asian countries, Japan, and the USA.

Table 2 shows aggregate indicators for Northeast Asia such as GDP, population, and per capita GDP.

Figure 2 shows historical trend in GDP in terms of PPP for major countries such as the USA, Japan, and China-Russia combined. The population percentage along Japan sea coast prefectures of Japan is projected for 1995-2025 on the basis of the above gravity model, showing its rising tendency toward 2025 after 1995

第1表 北東アジア諸国、日本、アメリカのGDP、1人当GDP（ドル建とPPP）
Table 1 GDP and per capita GDP of Northeast Asian countries, Japan and the USA

	(上限：Upper bound)			(下限：Lower bound)		
	1995	2010	2025	1995	2010	2025
中国：China						
GDP	596.7	1965.0	5799.5	517.5	1429.8	3863.9
伸び率 Rate of Increase(%)		8.3	7.5		7.0	6.9
平均 Average ROI(%)			7.9			6.9
1人当GDP(per capita)	497.1	1439.6	3917.5	431.1	1047.5	2610.0
GDP(PPP)	3016.7	9934.5	29320.5	2616.3	7228.6	19534.7
1人当GDP(PPP)(per capita)	2513.2	7278.2	19805.6	2176.2	5288.0	13175.7
韓国：ROK						
GDP	372.5	934.2	2149.3	332.9	746.8	1555.4
伸び率 Rate of Increase(%)		6.3	5.7		5.5	5.0
平均 Average ROI(%)			6.0			5.3
1人当GDP(per capita)	8305.1	18670.8	40912.9	7422.0	14925.0	29607.3
GDP(PPP)	501.1	1256.7	2891.2	447.8	1004.6	2092.3
1人当GDP(PPP)(per capita)	11172.1	25115.9	55036.0	9984.0	20072.6	39827.7
北朝鮮：DPRK						
GDP	39.1	67.3	110.0	36.8	59.7	89.2
伸び率 Rate of Increase(%)		3.7	3.3		3.3	2.7
平均 Average ROI(%)			3.5			3.0
1人当GDP(per capita)	1635.0	2532.3	3659.3	1541.1	2243.8	2969.0
GDP(PPP)	86.0	148.1	242.0	81.0	131.3	196.2
1人当GDP(PPP)(per capita)	3596.9	5571.1	8050.4	3390.4	4936.3	6531.9
モンゴル：Mongolia						
GDP	3.1	5.6	10.4	3.0	5.2	9.4
伸び率 Rate of Increase(%)		4.0	4.2		3.9	4.0
平均 Average ROI(%)			4.1			3.9
1人当GDP(per capita)	1257.2	1693.4	2563.0	1184.3	1566.3	2316.5
GDP(PPP)	6.7	12.2	22.6	6.5	11.3	20.4
1人当GDP(PPP)(per capita)	2732.2	3680.1	5569.9	2573.8	3403.9	5034.2
ロシア：Russia						
GDP	421.3	844.1	2114.3	401.6	650.0	1295.0
伸び率 Rate of increase(%)		4.7	6.3		3.3	4.7
平均 Average ROI(%)			5.5			4.0
1人当GDP(per capita)	2842.6	5984.4	16090.9	2709.7	4607.7	9856.1
GDP(PPP)	915.6	1834.4	4594.8	872.8	1412.6	2814.3
1人当GDP(PPP)(per capita)	6449.9	13578.5	36510.3	6148.3	10454.9	22363.4
日本：Japan アメリカ：USA						
GDP	3218.6	4846.5	6333.4	6310.7	8848.9	11909.8
伸び率 Rate of Increase(%)		2.8	1.8		2.3	2.0
平均 Average ROI(%)			2.3			2.1
1人当GDP(per capita)	25734.8	38148.2	52192.0	23625.0	29606.0	35821.0
GDP(PPP)	2266.9	3413.4	4460.6	—	—	—
1人当GDP(PPP)(per capita)	18125.0	26867.8	36758.8	—	—	—

(注) GDPとGDP(PPP)の単位は10億ドル(1990年価格)。

Note: GDP and GDP(PPP) are based on 1990 billion dollars.

第2表 北東アジア合計—GDP、人口、1人当たりGDP
Table 2 GDP, population and per capita GDP in Northeast Asia

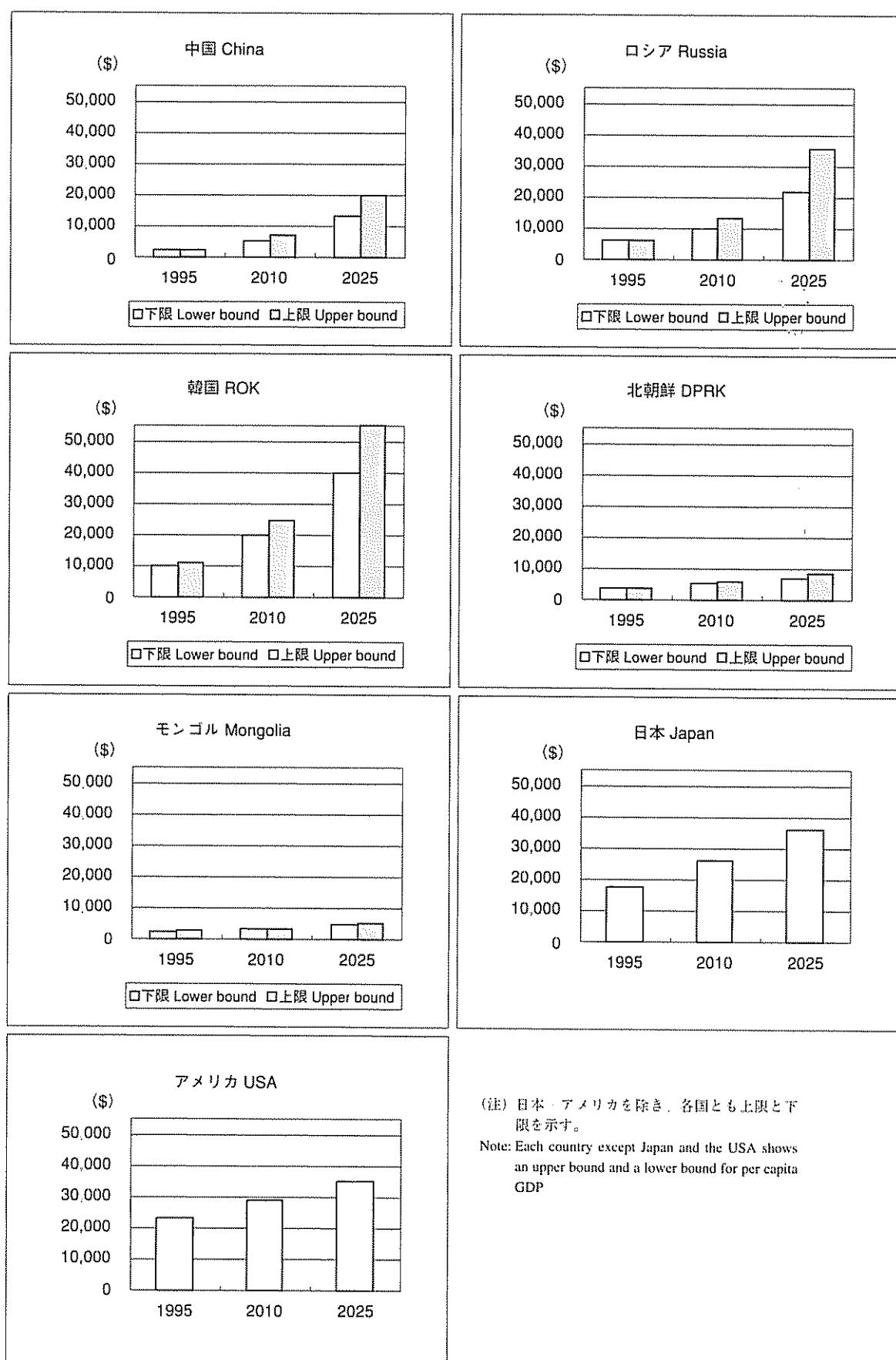
北東アジア（中国東北三省、ロシア極東地方、モンゴル、韓国、北朝鮮）：上限
Northeast Asia(Northeast region of China, The Russian Far East, Mongolia, ROK, DPRK): Upper Bound

変数名 Variable	年 Year	1995	2010	2025	平均伸び率 Average
GDP(百万ドル : Million dollars)	501,555.1	1,289,513.5	3,175,307.6		
伸び率 Rate of Increase(%)		6.09	5.80		5.94
人口(千人) Population(thousands)	180,672.1	204,188.3	222,133.4		
伸び率 Rate of Increase(%)		0.81	0.56		0.69
1人当GDP(per capita)(ドル:\$)	2,776.1	6,313.6	14,280.4		
伸び率 Rate of Increase(%)		5.32	5.27		5.29
GDP(PPP)(百万ドル : Million dollars)	968,484.6	2,685,590.4	7,235,252.9		
伸び率 Rate of Increase(%)		6.55	6.34		6.45
1人当GDP(PPP)(per capita)(ドル:\$)	5,360.5	13,148.6	32,532.3		
伸び率 Rate of Increase(%)		5.79	5.82		5.80

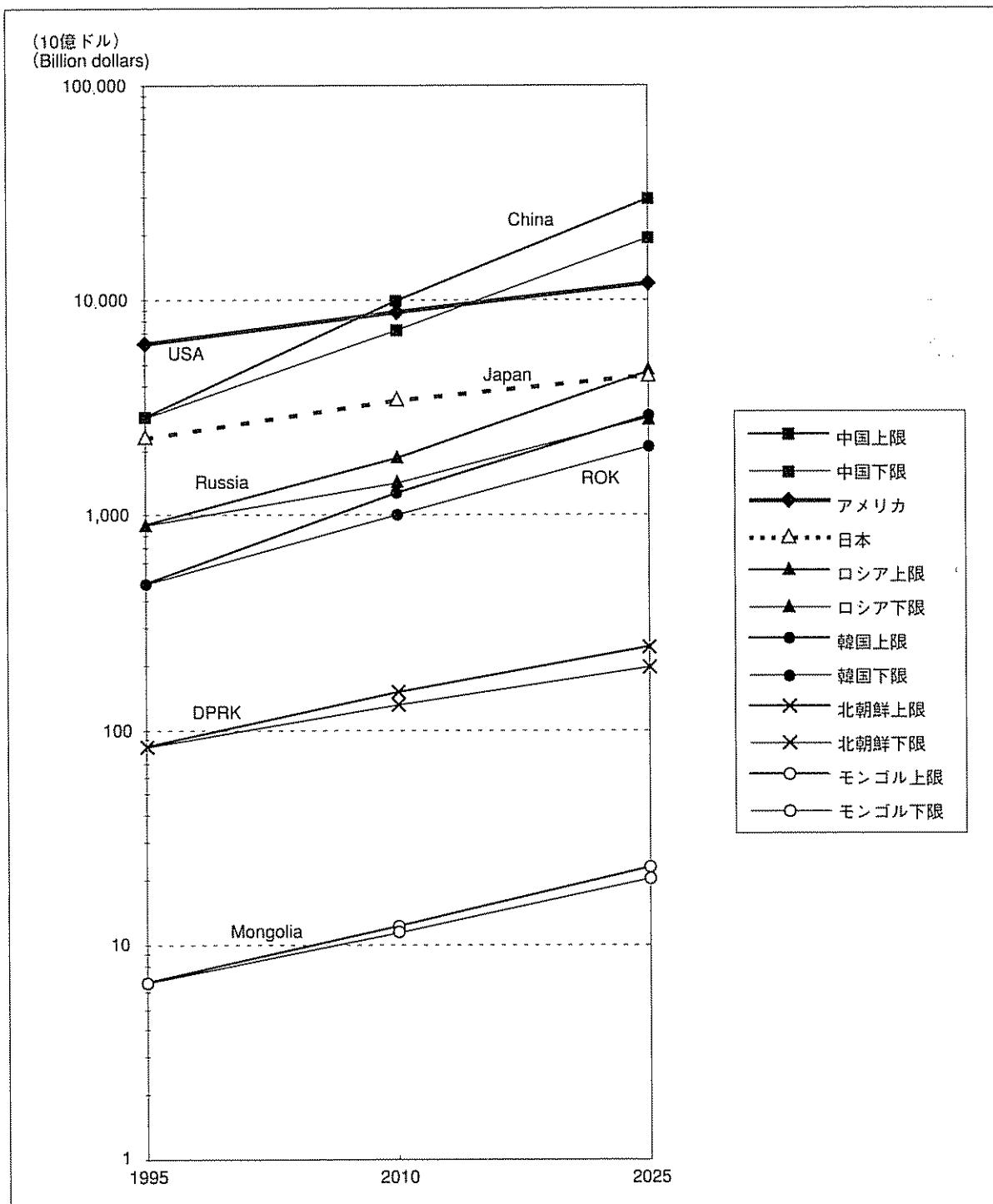
北東アジア（中国東北三省、ロシア極東地方、モンゴル、韓国、北朝鮮）：下限
Northeast Asia(Northeast region of China, The Russian Far East, Mongolia, ROK, DPRK): Lower Bound

変数名 Variable	年 Year	1995	2010	2025	平均伸び率 Average
GDP(百万ドル : Million dollars)	445,542.0	986,330.8	2,151,760.7		
伸び率 Rate of Increase(%)		5.15	5.04		5.10
人口(千人) Population(thousands)	180,611.2	203,644.1	221,140.7		
伸び率 Rate of Increase(%)		0.80	0.55		0.67
1人当GDP(per capita)(ドル:\$)	2,466.9	4,843.8	9,734.8		
伸び率 Rate of Increase(%)		4.39	4.52		4.45
GDP(PPP)(百万ドル : Million dollars)	845,920.9	1,938,419.6	4,616,585.7		
伸び率 Rate of Increase(%)		5.37	5.61		5.49
1人当GDP(PPP)(per capita)(ドル:\$)	4,683.7	9,519.2	20,882.4		
伸び率 Rate of Increase(%)		4.61	5.09		4.85

第1図A 1人当たりGDP（1990年ドル、PPPベース）
 Figure 1A Per capita GDP in 1990 dollars based on purchasing power parity



第1図B 北東アジアと日・米GDP（1990年ドル、PPPベース）
 Figure 1B GDP (based on purchasing power parity in 1990 dollars) of Northeast Asian countries, Japan and the USA



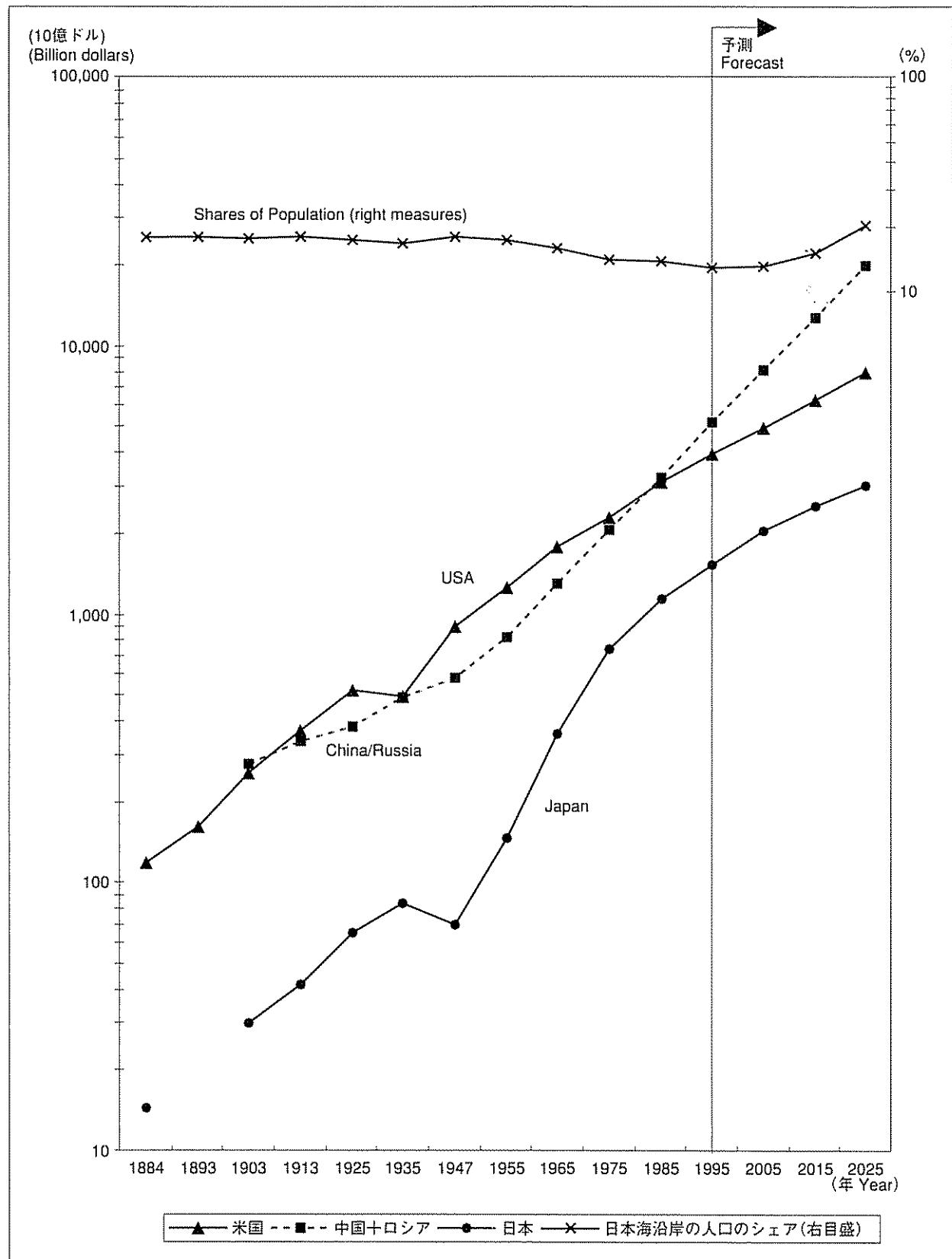
(注) 米国、日本、各國の1995年は上限と下限の平均。

なお、米国と日本はOECD2020年予測に基づく数値。

Note: The figures in 1995 show the average of the upper bound and lower bound

The figures of Japan and the USA are estimated on the basis of *THE WORLD IN 2020 (OECD)*

第2図 日本海沿岸10道県の人口のシェアと各国GDP(PPPベース)―実績と予測
 Figure 2: Shares of the population of ten prefectures on the coast of the Japan Sea and GDP (based on purchasing power parity) of each country-actual performance and forecast



ロシア経済－1998年夏

横浜市立大学名誉教授 佐藤 経明

本題に入る前に「回り道」から始めよう。

去る6月3日に出国、ウィーンの国際比較経済研究所で前所長のカジミエシ・ラスキと議論した後、モスクワで国際会議「ロシアの全体的安全保障環境」に出席、会議後しばらく残っていろいろな専門家に会ってからブダペスト、布拉ハを回り24日に帰国した。布拉ハではまたま郊外のシュティジン城で開催の「中部ヨーロッパ—コアか辺境か？」にも参加することになった。

ロシアは金融危機の最中、ハンガリーは去る5月総選挙後の組閣の難産中、チェコは19日～20日の総選挙の最中という興味尽きない時期である。総括的な印象から先に言うと、改めてロシアと中欧の差というものをつくづくと考えさせられた。

モスクワは全てコントラストのきつい「原色」の街である。都心のブーシキン広場の裏通りに超近代的なビルが出来ていて、厳しいセキュリティ・チェックを通って中に入ると、ディーリングルームには数十台のコンピューターがずらりと並び、東京やニューヨークと変わらないような青年たちがそれに張り付いてディーリングをやっている。

かと思うと、地下鉄の入口に立って物乞いする老女が至る所で目に入る。ロシアに入った外資の70%以上がモスクワだが、その「繁栄」するモスクワですら「リッチ」なのは住民の10%、30%がまあまあ、残り60%は貧困層というのだから、外資の恩恵を受けない地方は推して知るべしだろう。

ハンガリーやチェコでも格差は広がっており、それが総選挙にも反映されたわけだが、ロシアのように極端ではない。同じ「市場経済移行」といっても、この両国ではともかくも全てが「普通」に動き始めたという感じがある。ロシアとこの両国との間にはもはや回復不能なまでに距離が開いたという印象だった。

この両国にも「光」と「影」は付きまとっている。ハンガリーは一昨年後半から年率4-5%の成長軌道に乗っているが、外資参加企業を土台にした輸出主導型の成長に偏り、たくさんの土着中小企業は置き去りにされた。それが5月の総選挙にも反映されたわけだ。かつてハンガリー経済改革の「父」と呼ばれ、体制転換後、一時は社会党党首も務めたレジュー・ニエール・シュ氏が「社会

党は敗北に倣した」と私に率直に語った理由もそこにあった。

もう一つ、1994年5月選挙で政権の座に就いた社会党は、「双子の赤字」、高インフレを抱える当時のハンガリーでのマクロ経済安定化課題の緊急性を理解せず、約8ヶ月間を空費した。そのため翌95年4月からのいわゆる「ボクローシュ・パッケージ」(当時の蔵相の名を取った引締め政策)を必要以上に厳しいものとした。急激な社会保障改革も高年層の不安を駆り立てた。このため、市場経済化の犠牲になった層の票が、大学授業料廃止、年金引き上げ、公共料金統制など、「社会主義政権」並みのボビュリスト的スローガンを掲げた青年民主連合に流れたのである。

チェコの場合には、西側に評価の高かったマクロ経済安定化と、クーポン私有化による企業レベルのリストラの遅れから生じた国際競争力の低下との間に潜在的に増大していた矛盾が、通貨危機をきっかけに一挙に吹き出したのだから根は深く、一旦成長軌道に乗った経済の裾野を広げるのが課題のハンガリーよりも、困難の度合いは大きいように思われる。今後、数年の調整期を必要とするのではないか。

チェコの総選挙でも市場経済化から生じた歪みが見事に反映された。社民党は第一党の地位を占めたが、支持票は後進地帯に偏り、前首相クラウスの率いる市民自由党は「繁栄」する布拉ハでは50%以上の支持を受けた。社民党の勝利というよりもむしろ、クラウスの健闘が目立っていた。議席数200の国会では「組み合わせ」次第で社民党中央の中道左派連合政権も出来れば、第二党首班の中道右派連合政権も出来る可能性があるのである。何ともややこしい。ハンガリーでは6月末に35歳の青年民主連合党首、ヴィクトル・オルバンを首班とする連立政権の成立が伝えられたが、チェコの場合には社民党の少数単独内閣を市民自由党が閣外協力するという、予想外のやり方で新政府が成立する見通しとなってきた。

ロシアは金融危機の最中だったが、ビジネス・サイドは案外と醒めた見方をしていた。冒頭に書いた多国籍金融会社で会った若いロシア人の金融アナリストに「エリソイン大統領は金融危機のピークは越えたと語ったが、どう受け止めているか」と聞いたら微笑して「大統領も

政府も投資家の心理を理解していない」と答え、個人の意見だが前置きしてルーブルの実勢は1ドル＝9ルーブルかも、とまで言ったのである。彼によると西側から更に100-140億ドルの金融支援を受け、借金奴隸になってしまふ通貨切り下げを避けようとしている理由は「政治」だという。つまり、普通のロシア人は株式市場、証券市場など自分には縁のないことと思っているが、通貨切り下げでインフレになれば、消費財、食料品の輸入依存度がひどく高いだけにただでは済まない。先日も炭鉱労働者が鉄道線路を封鎖したばかりだ。しかし、すべての「締め切り日」（デッドライン）は西暦2000年大統領選挙だ、というのがその結論だった。言い換えると、キリエンコ政権はそれまでのワンポイント・リリーフということであろうか。

このように「政治」の問題は無視できない。西側の中・東欧諸国の評価が高い理由はそこにある。ハンガリーを例に取ると、選挙の度ごとに前政権が国民に拒否されている。体制転換直後の1990年には社会党（旧社会主義労働者党）が壊滅的な敗北を喫したが、94年選挙では単独過半数を獲得して政権に返り咲いた。それが今度はまた敗北したのである。しかし、政権交代は厳密に議会制民主主義の手続きにしたがって行われ、ロシアのように大統領の専断で政府が突然、罷免されるというようなことはない。西側が根本のところで中・東欧諸国に抱いている安心感はここから来ている。こういう横並びの比較をしないでロシアだけを観ていたのでは、分かることも分からぬのではないか、というのが私がここで強調したい点である。

モスクワの会議でもそうだったが、帰国直前、プラハ郊外のシュティジン城であった国際会議でも、「国内混乱」から生まれる「ロシアの新たな脅威」を説く欧洲勢に、ロシア側はNATO（北大西洋条約機構）東方拡大の「外的脅威」で反論するというすれ違いが繰り返された。

こういう混沌とした状況がいつまでも続いていると、10年くらいの見通しでは一種の権威主義的体制が出来ているということになりはしないか。私のこの見通しにハンガリーの世界経済研究所長アンドラーシュ・イノタイは「いや、それはむしろ楽観的な見通しだ」と言ったものである。私が深い憂慮の念を抱いて帰国したのも、無理もないことであった。

さて、本論に帰ろう。

昨年秋から今年初めにかけてのロシア経済の評価に関しては、ロシア内外の専門家の間に少なくとも3つの合

意があった。

第1は、7年間続いた生産低下が1997年によくやく「底」を打ったということである。インフレも年率15%程度に落ち着いた。このため一部に樂観的な見方が広がったが、実態はそのようなものではなかった。切尔ノムイルジン首相（当時）は98年年頭閣議での発言で、1997年のGDPは1.2%、工業生産は3.2%のプラスと述べていたが、1月20日の国家統計委員会の発表はそれぞれ0.4%、1.9%となっていた。

ここで思い出されるのは昨年9月のウリンソン経済相とガイダール元首相代行との興味あるやり取りで、ウリンソンが97年1-5月の統計でGDPは0.8%のプラス成長と語ったのに対し、ガイダールが「君は統計を信用しているのか」と質問、ウリンソンが「なるほど、0.8%は正しいとしても、プラスかマイナスかは誰も知らない」と答え、逆に「正しい規定は？」を問い合わせたところガイダールが「経済成長への傾向はあるが成長そのものはない」というチュバイスの定義で答えたというものである（「コメルサント・デイリー」9月11日号）。

第2は、「底」を打ったのは確かとしても、現状のままでは中・長期的に極めて控え目な成長しか期待できない、ということである。その理由は以下の通りである。

・旧ソ連から引き継いだ資本ストックは予想以上に小規模な上に老朽化がはなはだしいことである。事実、1990年の時点でのソ連の資本ストックは1975年を上回るものではなかったという推計がなされている上に、1990年以降の投資低下の継続がある。ネットの投資率はGDPの10-11%程度、資本ストックの平均ヴィンティージは良くて13年程度と推計されている。

・ここからして、中・東欧諸国が1993年を境に経済成長を再開した時のように、既存資本ストックの利用率向上による経済成長の余地が小さいことが分かる。したがって、ロシアにおける経済成長は基本的には新規投資に依存せざるを得ないが、これは1997年においても、減少率は緩慢化したものの、依然低下が続いている。1997年の低下率は5.5%であった。

・したがって、いかに国内の投資資源を動員するかが決め手となるが、これは次のような厳しい条件に阻まれている。

1) 国民の貯蓄率は低く、そのかなり多くの部分は銀行ではなく、外貨のキャッシュで保有されている。

2) 銀行は高い利回りを約束する短期政府債券（GKOなど）

に引き付けられ、産業に投資しようとはしない。更にこの政府債券市場では、いつでも引き上げることが出来る外国の短期資金（ホットマネー）の比重が52%にも達しており、昨年夏のアジア経済危機後、10月から11月にかけて起こった事態はまさにこれであった。この時、およそ80億ドルが流出、これに対して中央銀行は98年1月30日に公定歩合を28%から42%に引き上げることを余儀なくされた。これはその後、漸次引き下げられ、3月16日の時点では30%となつたが、それでも昨年9月の21%よりはかなり高かった。これが去る5月18日を中心とした約15億ドルの外資流出で50%に、ついで5月27日には150%の水準に引き上げされ、その後6月5日に一旦60%に下げられたが、6月29日からは80%に再び引き上げられており、本稿執筆の時点（7月11日）では通貨、債券、株式のトリブル安から中央銀行が100%以上への再引き上げ行うのではないかという憶測が急浮上してきている（「日経」7月8日号）。

3) 政府投資は財政赤字（GDPの8-9%）に阻まれているし、他方、推計1,000-1,200億ドルが海外への資本逃避となっている。

4) そこで国内の貯蓄動員が困難となると、即効を狙うには大規模な海外からの直接投資が考えられるが、これまた上記の理由からして海外投資の大部分は製造業ではなく、ポートフォリオ投資に向けられていること、産業に向けられている場合にも比較的、将来展望の明るいエネルギー資源産業に向けられておるほか、ロシア側からする投資環境整備が十分でないため、急速に増加するとは考えられない。

以上の条件を前提にすると、1998年から2001年にかけてのロシアの予想可能な経済成長率は、稼働率の若干の向上をベースにして年率1-2%の線を越えることはないものと見て大過なさそうである。去る4月下旬によく議会の承認を受けたキリエンコ新首相も、その直後に先に触れた通貨危機に襲われ、議会演説で早くも今年のマイナス成長の見通しを認めざるを得なかつた。

ロシア政府筋の一部には、この経済危機をアジア金融危機の波及として単純化する向きがあるが、それは危機の根底にある「構造」を見誤ったものというほかはない。この「構造」の第1として挙げるべきものは、これまでの政策を支えてきたロシア経済のファンダメンタルズが脆弱化しつつあることである。

周知のように、ロシアはこれまで石油資源輸出で大幅

の貿易黒字を上げ、これでもって国内生産の極度の衰退と裏腹の大幅な消費財・食品輸入をまかなくてきた。現在起きているのはこの構造の基礎が揺らぎ始めているという、かつてない事態である。

確かに1997年にはおよそ10年続いた石油生産の低下（1996年の生産高は1987年の半分強）は底を突き、わずかな増加（前年比14%増の3億560万トン）を記録すらしたが、今度は石油製品の世界市場価格の急落が石油生産からロシアが利潤を上げることを阻むことになった（昨年度は原油の42%、石油製品の34%が輸出向けであった）。それだけでなく、天然ガス生産も昨年、初めて減少を示し、CIS外への輸出も5%減となった。

これは1997年度経常収支の悪化傾向に反映されており、中央銀行の報告でも確認されている。とりわけ顕著なことは、1997年度の黒字のほとんどが第1・4半期に記録されたものだということである。以後の3つの4半期では、わずかながらすでに5億ドルの累積赤字（GDPの0.7%）が記録されている。これはソ連邦崩壊以来、経常収支赤字の最初の兆候である。差し当たりまだ微弱な傾向とは言え、これはロシアの経常収支の大幅黒字を「安心材料」としてきた海外投資家の信認に響く可能性を孕んでいる。

1998年の経常収支見通しに関して言えば、問題は赤字ではなく、赤字幅がどの程度に止まるか、そしてロシアがどの程度、このギャップを埋めるために外資を誘致できるかに移ってきているようだ。勿論、予想される程度の経常収支赤字は移行経済にとって自然な現象であるけれども、問題はポートフォリオ投資ではなく、企業のリストラを促進し、輸出競争力ある産業ないし輸入品に対抗しうる産業を育成できるような外資を誘致できるかであろう。国際石油価格の低落は貿易黒字への圧迫となり、したがって経常収支赤字傾向の促進材料となっているが、この赤字がどこまで維持可能かは、非居住者からの資本流入の性格（つまり、どこまで産業投資となるか）、資本逃避の性格と規模およびロシアの経済回復の程度に左右されることになろう。いずれにしても重要なことは、これまでの資源輸出＝消費財・食品輸入という、いわば「贅沢」な政策の前途に赤信号が灯ったということである。

「構造」の第2は、ロシアの国家財政が短期国債市場を通じて、極度に国際金融市场の剥き出しの影響を受けるようになってしまったことだ。これは1995年以来のインフレ抑制策の帰結でもあった。周知のように、1995年から取られたインフレ抑制策は、国家予算に対する中央銀

行の自動的融資の廃止、それに代わる短期国債の発行と国際金融機関からのローンの予算組み入れ、コリドール制（目標相場圈）によるルーブル交換レート安定の3つの柱から成り立っていた。これによってインフレ率の継続的な低下を達成したことは疑いもなく大きな成果だったが、半面、好利回りの短期国債は産業投資に向かうべき民間資金の極端なクラウディング・アウト効果を生み、コリドール制によるルーブルの高目誘導は国内製造業の国際競争力を更に弱めることにもなった。

短期国債は通常2-3ヶ月の期限で発行されるから、これへの財政資金依存は絶え間ない借り換えとなり、1997年後半には既発行分償却のための発行となり、財政へのネットでの貢献は皆無という状況になっていた。短期国債の利回りが高く、国外で調達したほうが資金コストが安いため、政府は次第に国際金融機関やユーロ市場での調達の比重を高め、1997年には国内調達と国外調達の割合が逆転するようになってきていた。国内短期国債市場での非居住者の比率は30%を大きく越えていたから、政府資金調達に占める外資の割合は70%近くに達していたものと推測されている。

このため国家財政が国際金融市场の動搖にむき出しにさらされるという結果となった。インフレ抑制の「妙薬」と考えられたものがその反対物に転化し、国家財政自体が外資依存の「麻薬漬け」体質となつたのである。この「構造」がなければアジア金融危機の波及は余程度が軽くて済んだに違いない。アジアの場合にも言えることだが、新興市場経済ないし移行期経済が短期資本（ホット・マネー）にまで門戸を開いたことが果たして賢明であったかが、問われて然るべきだろう。少なくとも明らかなことは、グローバルな資本自由化のメリットのみが強調され、それに伴うリスクは軽視されていたことである。

以上のような事態を招いたことには、1992年以来取られてきた金融通貨政策偏重の経済政策に大きな責任がある。マクロ経済安定化はその金融・通貨的側面にのみ限られるべきではなく、リアル・セクターの安定化も同時に配慮されるべきなのに、それが軽視されてきた。IMFに代表されるこのスタンダードな考え方の基本はおよそ次のようなものであろう。高金利政策を取れば海外からの資本流入を促し国内からの資本流出を阻止することになり、通貨交換レートへの圧力が軽減される。高金利と信用引き締めはまた国内需要を収縮させ、輸入抑制と輸出ドライブにつながる。終局的には通貨安定と国際収支の

均衡をもたらし、金利引下げが可能となり、生産回復につながっていく。だが、現実はこういう教科書的な考え方から程遠いものであった。高インフレ時には避けられない高金利と信用抑制は、ある時点で「生産阻害的」となって生産低下に拍車をかけ、他方、バーター取り引きや各種の疑似貨幣が企業間決済の平均42%を占めるという事態を招いたのである。

にもかかわらず、5月中旬のルーブル危機以前のロシア当局者の考え方には、何ら発想の変化は窺われなかつた。去る3月初め、経済企画庁とロシア経済省との定例シンポジウムにおいても、また5月中旬に来日したエゴール・ガイダールとの討議においても、彼らが等しく強調したのは、通貨・金融的パラメーターを昨年9月当時達成していた、最高の水準（例えば公定歩合は21%）にまで回復したならば、内外投資家の「信認」が戻り、逃避した資金も還流し経済回復が促進されるだろう、ということに尽きていた。ただ一つ、彼らが「現実的」であったのは、昨年、生産低下が「底」を突いても、それが直ちに「持続的成長」につながらないことを認めていたことである。彼らの表現によると、その中間に「ポジティヴ・デプレッション」（アレクセイ・ウリュカーエフ移行期経済研究所副所長）、もしくは3年、5年、もしかしたら8年続くかもしれない「調整期」（アレクサンダー・ハンドルーエフ中央銀行副総裁）がある、ということである。言い換えると、昨年9月の最良の通貨・金融パラメーターを回復するのが精一杯で、持続的成長という「贊沢」な議論はしていられない、ということであった。「ポジティヴ・デプレッション」というのは中・東欧の金融当局にもある考え方で、要するに厳しい信用収縮政策でもって企業にリストラを「強要」するというのである。だが、そこには当然、限度があることは言うまでもない。

去る5月18日のルーブル危機は、こうした短期外資依存の構造的な危機が吹き出したものに過ぎない。昨年6月すでに国際決済銀行（BIS）は、海外銀行に対するロシアの債務は691億ドル、対外総債務は1,500億ドルに達すると警告を発していた。BIS推計によると、総債務はGDP比32%で、そのうち380億ドルは1年内に償却期限が来るという。そのシェアを見ると、アメリカの銀行が10.9%、日本の銀行は1.2%だが、ヨーロッパの銀行は65.8%を占め、ロシアの危機が容易に波及することが推測できるようだ。

昨年9月の時点で約240億ドルあった外貨準備は本年1月にはすでに180億ドルに減少していたが、5月危機以降、

中央銀行がルーブルを買い支えたため、6月末には140億ドル前後の水準に落ちていると推測されている。2001年に期限が来る債務だけでも140億ドルあることが、ロシアの支払能力についての不安を高めている。

本稿執筆の7月11日現在、基本的合意が成立しつつあるらしいIMF主導のロシアに対する追加的金融支援約100億ないし150億ドルの供与をめぐる交渉は、以上を背景として行われている。ロシア側の交渉担当者、チュバイスの7月10日の発言によると、IMFの供与はこのうちの40%（つまり40億ないし60億ドル）で、残りは世銀および主として民間銀行からの供与であるという。IMF、世銀はともかく「主要部分」(bulk) を供与すると期待されている民間銀行の反応はどんなものであろうか、という疑問が浮かぶことであろう。

今までのところ、政府・中央銀行の当局者は勿論、エリツイン大統領もルーブル切り下げの可能性を断固として否定している。冒頭にも書いた通り、その理由は「政治」ばかりでなく、ルーブルの切り下げは国内銀行システム全体における広範な支払不能危機の口火を切り、大小すべての銀行に波及するということにあるようだ。

去る7月10日のロイター・ロンドン電によると、ロンドン訪問中のロシア・インコム銀行頭取、ウラジーミル・ヴィノグラードフは、その場合には「ロシアの銀行は通貨の先物取引とポートフォリオ投資家にたいする支払義務のデフォルトを余儀なくされ、ついで短期国債(GKO) および他の政府証券を現金化しようとして市場の危機を引き起こすだろう」と語ったという。彼によると、「10%の切り下げでも悲惨な結果を引き起こすだろうし、30%の切り下げとなるとインドネシアと変わらぬ事態を引き起こすだろう」といわれる。

しかし、ルーブルは救えるだろうか。この点での私の見方は、かつては「天敵」であったが、アジア危機をきっかけに激しいIMF批判者に転じたジェフリー・サックスに近い。サックスは去る6月5日、「インターナショナル・ヘラルド・トリビューン」紙に寄稿した中で（Jeffrey Sachs "High Time to Rein in the IMF") 「救済融資は不公正で非効率的だ。ルーブル救済融資は以前のローンが返済され、投機家たちが大きな損失なしにカネを回収するの

に必要な間、ルーブルの価値を維持させようとするものだ」と批判し「しかし、おそらくルーブルは救えないだろう」と予想しているのである。

IMFが音頭を取った救済融資も、ルーブル切り下げを引き延ばすことは出来ても、それを防ぐことは出来ないだろう。ルーブルの実勢は1ドル=9ルーブルはおろか、11ないし12ルーブルともいわれるから、仮にこの夏は凌ぐことが出来ても、秋に次の「波」が来たら到底、持ちこたえることは出来ないだろう。もし、現行レートを維持しようとしたら、100億-150億ドルの支援では足らず、おそらくその倍額近い融資が必要となるのではあるまい。すでにムーディーズは約200億ドルが必要という試算を示している（ロイター ロンドン電、7月8日）。ムーディーズはロシアのルーブルに「最低」の格付けを与えているが、それは債務の借り換えの可能性が不可能という見方に立っているからである。

むしろ、切り下げによってロシア政府に当事者責任を果たさせるようにした方が、長期的に見てロシアの利益になるのではなかろうか。もし、今回の救済融資がエリツイン体制維持の政治的動機から出ているとしたら、それこそ本末転倒であろう。西側のそのような「政治的」対応こそが、「構想も良くなければ実行も良くなく、行方の分からぬ改革」（アレクセイ・アルバートフ）を許容し、今日の事態を招いた責任の多くを負うべきものだからである。今日の事態は、IMFも惜んで採用された1995年以降の通貨金融政策の帰結であり、この政策の是非に立ち返って政策構想を再検討しない限り、ロシア経済に出口はないと思われるからである。（7月11日）

[追記]

去る7月20日にIMF理事会で決定された総額112億ドルの年内追加支援（即时は48億ドル）、および1999年末までに計226億ドル供与という異例の巨額の金融支援で、当面のロシアの通貨危機は回避された。ここで読者の注意を促したいのは、①この総額226億ドルが上記の「倍額近い」に近いこと、②これらは逐次、国債、外債の元利返済に充てられ、産業投資に回るわけではないから、ロシア経済の基本問題の解決に何らつながるものではないことである。（7月25日）

The Russian Economy - Summer 1998 *(Summary)*

Tsuneaki Sato
Professor Emeritus of Economics
Yokohama City University

As far as the assessment of the Russian economy from last Fall till the beginning of 1998 is concerned, there are at least three major points of agreement among experts both inside and outside of Russia.

First of all, the decline in output, which has lasted already seven years, hit "bottom" in 1997. The inflation rate settled at around 15%. Because of this, an optimistic view spread through part of the international society, but the actual situation is not as good as was expected. Although Victor Chernomyrdin, the Prime Minister at the time, stated at a Cabinet meeting at the beginning of 1998 that the GDP growth in 1997 would be 1.2% and industrial production would increase by 3.2%, the State Statistical Office announced on the 20th of January 1998 that real GDP growth in 1997 was only 0.4%, and industrial production 1.9%. It is appropriate to recall a very interesting conversation in September 1997 between Yakov Urinson, Economics Minister, and Yegor Gaidar, once the Acting Prime-Minister of the Russian Government. Gaidar asked Urinson, referring to the reported GDP growth of 0.8% for the first five months of 1997, if Urinson trusted statistics. Urinson replied that no one knew whether the 0.8% was plus or minus, and asked conversely for the correct definition of the present situation of the Russian economy, and was given the answer by Gaidar, with the full agreement of Chubais, that "there is a tendency to grow, but not growth itself." ("Kommersand Daily," 11 September 1997).

Secondly, although "bottom" was hit in 1997, only very modest growth can be expected for the medium and long-term—especially given the present conditions. The reasons for this are as follows:

- The capital stock inherited from the USSR was much smaller and more obsolete than hitherto considered. In fact, in 1990 Soviet capital stock might well have been no greater than in 1975. The degree of economic obsolescence of inherited capital stock in Russia has been further aggravated by the continued decrease in investments since 1990. Net investment ratio might well be under 10-11% of the GDP—much lower than the 20% claimed by the official statistics. The average age of the existing capital stock is, at best, around 13 years old.
- Contrary to the experience of some Central and Eastern European countries, there is rather little room for economic growth through better utilization of the existing capital stock. Therefore, the economic growth of Russia has to depend on new investments. However, although the decrease in the rate of investment is less than before, it is still continuing to decline. In 1997, investment decreased by 5.5%.
- How to mobilize domestic investment resources is therefore the crux of the matter, but it is hampered by the following factors:

1) Savings ratio of the population is low, and a considerable part of it is held not in banks, but in foreign currencies in cash.

2) Banks attracted by short-term state bonds (GKO, etc.) with a high rate of return, are not inclined to make investments in industries. Also, it should be noted that the share of the foreign short-term capital (hot money) in the state bonds market reached as high as 52%, which by its own logic could be withdrawn at any time, as was shown in October and November 1997 in the wake of the Asian monetary-financial crisis. Roughly US\$ 8 billion of foreign capital was withdrawn from Russia, and in response, the Central Bank of Russia was forced to raise the official refinance rate on the 30th of January from 28% to 42%. Although the rate had step-by-step been reduced and as of the 16th of March stood at 30%, it was still much higher than the 21% of September 1997. Further, the rate increased to 50% due to US\$1.5 billion being withdrawn around the 18th of May, then, finally increased again to 150% on the 27th of May. On the 5th of June, it declined to 60%, but then rose again to 80% on the 29th of June. At the time of writing this essay—11th of July—speculation has rapidly come to the fore, that the Central Bank will raise the rate to more than 100% due to the "triple depreciation" of currency, bond, and stock ("Nihon Keizai Shinbun," July 8, 1998).

3) Government investments are hindered by budget deficit, which equals roughly 8-9% of the GDP, while about US\$100 to \$120 billion are held abroad with overseas foreign banks as a result of capital flight.

4) If domestic savings cannot be mobilized and utilized, attracting large-scale foreign investment might be the only possible short-term scenario. However, foreign investments do not seem to increase rapidly, because, due to the above mentioned reasons, most investment is directed not towards manufacturing industries, but portfolio, and even if invested in industries, it is mainly in the energy-resource sector, which has rather good prospects. On top of this, the investment environment of Russia is not good enough to attract foreign investment.

Considering the above mentioned situation and conditions, we can expect quite a modest economic growth for Russia, probably not exceeding the range of 1-2% for the period of 1998-2001, based mainly on better utilization of existing capital stock. The New Prime-Minister Sergei Kirienko had just been approved by Parliament at the end of April, when the above mentioned financial crisis occurred, and had to admit to the minus growth of 1998 at the beginning of his career.

There is a tendency of some government information sources to simplify this economic crisis as an effect of the Asian financial crisis. This is an absolute misunderstand-

ing of the "structure" behind the crisis. The first point about the changes in the "structure" is that the Russian economic fundamentals, which supported previous policies, are becoming weak. As is well known, Russia earned a great amount of trade surplus with exports of oil and gas resources, and thus covered the expenses for consumer commodities and food imports. The current economic crisis means that the base of this "structure" has begun to be shaken, which has never happened before.

It is true that the decline of petroleum production, which continued for around 10 years, stopped in 1987, and even recorded a slight increase. The output in 1996 was a little more than half of the amount in 1997, and increased to 30.56 million tons, a 1.4% increase compared to the previous year. However, the rapid fall of petroleum products' prices in the world market is now preventing Russia from earning benefits from producing oil. 42% of crude oil and 34% of petroleum products were for export in 1997. Moreover, natural gas production showed a decline last year for the first time, and exports other than to the CIS countries decreased by 5%.

The Central Bank of Russia reported that this was reflected in the aggravation of the current account balance in 1997. It should be particularly noted that the current account surplus in 1997 was mainly earned in the first quarter of 1997. In the latter three quarters, US\$ 500 million of cumulative deficit, 0.7% of GDP, was recorded. This is the first sign of deficit since the collapse of the Soviet Union. Although this is a rather small sign, it could possibly affect the confidence of the foreign investors, who took the large trade balance surplus as security.

Regarding the prospects for the current account balance in 1998, the problem is not a deficit itself, but is how little deficit could be kept, and how much foreign investment Russia can attract to fill the gap. Of course, a current account balance deficit, which can be expected, is rather normal for an economy in transition. However, the point is not portfolio investment, but whether Russia can attract direct investment to grow internationally competitive industries with restructuring enterprises together. A fall in the international oil price has been a pressure on trade surplus, and, therefore, has become a factor in accelerating the tendency of current account balance deficit. This deficit could be retained depending on the characteristics of foreign investment, i.e., how much is invested in industries, the characteristics of capital flight and scale, and the degree of the Russian economy's recovery. It is important, any way, to note that a red light is on before the "extravagant" policies, exports of natural resources to cover imports of consumer commodities and food.

The second point of the "structure" is that the state budget of Russia can now be influenced directly by and is exposed extremely to the turmoil in the international financial market through the short-term bond market. This dependency was caused by the measures for the suppression of inflation implemented since 1995. As is well known, there are three major measures to suppress inflation, which are to abolish automatic financing state budget by the Central Bank, to issue short-term bonds instead and include loans from international financial organiza-

tions in the budget, and to stabilize the exchange rate of the rouble by adopting an exchange rate corridor system, i.e., setting up a target zone. There is no doubt that these measures were a great achievement in continuously suppressing the inflation rate, however, short-term bonds, which can expect high returns, caused extreme crowding-out effects of private capital, which should have gone to investment in industries. Also, the rather high setting of the rouble by the corridor system has weakened international competitiveness of domestic manufacturing industries.

Since short-term bonds are issued with the deadline of two to three months, dependency on them causes constant refinancing, and in 1997 they became an issue for the redemption of the bonds previously issued. Therefore, they could not at all contribute to the state budget finance. Because short-term bonds have a good yield and financial costs are lower if sold overseas, the Russian government shifted its weight to international financial organizations and the euro market, and then in 1997 share of supply through the domestic market was superceded by overseas organizations. As the share of non-residents in the domestic short-term bond market exceeded well over 30%, it is estimated that foreign capital in the government financial supply reached nearly 70%.

As a result, the state budget finance has become greatly affected by the shaking of international financial markets. The special "remedy" for inflation turned into the opposite, and state budget finance itself has become a "drag addict," which depends on foreign capital too much. If Russia did not have this "structure," the influence of the Asian financial crisis would have been much smaller. It should be questioned whether it was wise to introduce short-term capital (hot money) into a newly emerging economy or economy in transition. It could be said also of Asia. One obvious point, at least, is that the merits of the global liberalization of capital flows were emphasized too much, and the risk along with it was not taken seriously.

The economic policy, which greatly inclined towards financial and monetary policy, is to blame greatly for the above mentioned current situation. The macroeconomy should not be stabilized only through financial and monetary areas, which have not been taken seriously, but also by stabilizing real sectors at the same time. Basic points of this standard idea, with the IMF as its representative, are as follows.

If high interest policy is adopted, capital flow from abroad will be promoted, and flow to abroad will be hindered. As a result, pressure on the exchange rate will be lightened. High interest and restrictive financial policies also shrink domestic demand, and they lead to discouraging imports and encouraging exports. Finally, a stable currency and trade balance will be well balanced, and interest will be able to be reduced, hence production will recover. However, in reality, the results were far different from this idealistic scenario. High interest and restrictive financial policies, which can not be avoided in a high inflation situation, encouraged a decline in production, while, on the other hand, led to the situation that

barter trade and various surrogate-money make up an average of 42% in business settlements.

Despite the situation, it does not seem that the responsible Russian experts had changed their views before the financial crisis happened in the middle of May in Russia. At the regular economic symposium held jointly by the Economic Planning Agency (EPA) of Japan and the Economics Ministry of the Russian Federation at the beginning of March, and the meeting in Japan in the middle of May inviting Yegor Gaidar to Japan, the Russian participants in both meetings strongly emphasized that, if the monetary and financial parameters of Russia can be recovered to the best level achieved in September 1997, for example, 21% of official interest, confidence of domestic and foreign investors will return, and overseas capital will flow back. As a result, the Russian economy will recover. However, there is one realistic idea, which they admit to, that although "bottom" was hit last year, this would not automatically lead to a period of "sustainable growth." By their expression, there would be a period of "positive depression" in-between (Alexei Ullykaev, Deputy-Director, Institute for the Economy in Transition), or a period of "adaptation" which might last for three, five, or even eight years (Alexander Khandruyev, Deputy-Chairman, Central Bank of Russian Federation).

In other words, to restore the most favourable monetary and financial parameters achieved in September 1997 is the most they can do, before engaging in "luxurious" talk about sustainable growth. The idea of "positive depression" can be seen among people in charge of financial matters in Central and Eastern Europe. This means to "force" enterprises to restructure by a financial restrictive policy. Needless to say, however, there is a certain limit to this.

The financial crisis in Russia that occurred on the 18th of May 1998 is only a sign of the structural crisis caused by the heavy dependence on short-term foreign capital. In June 1997, the Bank of International Settlements (BIS) was giving warnings that Russia's debts from foreign banks would reach US\$69.1 billion, and the total debts from overseas would be US\$150 billion. By the BIS estimates, the total debts would be 32% of the GDP, and US\$38 billion of that would have a redemption deadline within a year. The share of the European banks is 65.8%, while American banks is 10.9%, and Japanese banks is 1.2%. It can be forecast that European banks will be easily affected by the Russian economic crisis.

The foreign money reserve, which was approximately US\$24 billion in September 1997, declined to US\$18 billion in January 1998. It is estimated to drop to around US\$14 billion at the end of June due to the buying support of the rouble by the Central Bank of Russia. The fact that the debts, which will reach their deadline in the year 2001, are US\$14 billion raises anxiety about the solvency of Russia.

At the time of writing this essay, on the 11th of July 1998, negotiations about a US\$10 to \$15 billion loan as additional support mainly by the IMF, which seems to be on the way to signing the basic agreement, are being conducted as a result of that mentioned above. Chubais, the person in charge on the Russian side, mentioned on the 10th of July 1998 that 40% of the loan would be made by the IMF, which is US\$4-\$6 billion, and the rest would be by the World Bank and other private banks. One might question the reaction of the private banks, which are supposed to make up the bulk of the rest of the loan.

By now, not only the people in charge in the government and the Central Bank, but also President Yeltsin deny the possibility of the devaluation of the rouble. The reason might not be only because of "politics," but also because devaluation would trigger off a wide range of insolvency crises in the whole banking system, and will affect all banks, large, medium, or small.

However, can the rouble be saved? My view at this time is rather close to Jeffrey Sachs', who used to be my "natural enemy." He turned to an IMF critic after the Asian financial crisis. In his article written in June 5th's issue of the *International Herald Tribune*, entitled "High Time to Rein in the IMF," he critiques that: the rescue loan is unfair and inefficient. The rouble rescue loan is to maintain the value of the rouble until the previous loans are returned, and investors can recall their investment without much loss. He predicts that the rouble will not be able to be rescued, although the loan is given.

Although the rescue loan led by the IMF might be able to delay devaluation of the rouble, it will not be able to avoid it. Since it is said that the real exchange rate is far from 9 roubles for US\$1, it could be 11 to 12 roubles, even if the rouble can endure over this summer, it can not bear it after that, if the next "wave" comes. If the current rate is going to be maintained, US\$10 to \$15 billion financial support will not be enough, and probably double will be necessary. Moodies has already shown an estimate of approximately US\$20 billion to save the rouble (reported by Reuters, July 8). Moodies gives the Russian rouble the "worst" level rating, because it has a view that there is no possibility for refinancing the debts.

Russia as a whole might have benefits in the long-term, if the government is made to fulfill its responsibilities through devaluation of the rouble. If this rescue loan is a political move to maintain Yeltsin's regime, this is just like putting the cart before the horse. The "political response" of the West is at fault for the "ill-conceived and ill-implemented reforms, leading nowhere (Alexei Arbatov)," and is partly to blame for inviting the current situation. The current situation is also the result of the monetary and financial policy of Russia, which was adopted in coordination with the IMF and has been running since 1995. The Russian economy will have no future, unless policy concept itself is studied again by returning to the rights and wrongs of the current monetary and financial policy.

[Translated by ERINA]

極東ロシアと日本の間の善隣関係の一層の発展に向けて¹

ハバロフスク地方知事

ビクトル・I・イシャーエフ

1997年のクラスノヤルスク及び1998年4月の川奈でのエリツィン・橋本非公式会談は、将来的に日露経済協力を活発化させるための政治的な相互理解の基盤を築き、日露関係の一層の発展に大きく寄与してきた。これらの動きは、特にロシアの極東地域にとって非常に重要な意義を持っている。なぜなら、日本と極東ロシアは地理的に近いというだけではなく、以前から両者の間に経済協力関係が存在したためである。現在までの林業、鉱業、漁業をはじめ、様々な経済分野における極東ロシアと日本との関係を見ると、日本との経済協力というファクターは極東地域の経済開発の促進に有効であると言える。

ロシアで行われている経済改革が困難に陥っていることは事実である。また、極東地域の経済は他のロシアの地域とは異なった要素を持つため、その改革はより困難である。我々は、極東経済の発展のための条件を他の地域と等しくし、その経済成長の基盤を確保するために「1995~2005年極東ザバイカル地域の長期発展プログラム」を作成し、大統領及び連邦政府に提出した。このプログラムは大統領プログラムとしてのステータスを獲得し、政府に承認された。プログラムには、極東地域の経済発展における主な課題として、アジア太平洋地域における経済協力システムに積極的に参加することが含まれている。

ここで、経済改革開始から現在までの、極東地域における貿易及び投資を始めとした対外経済関係を分析してみる。1990年代当初には、外国投資家による協力と多額の投資さえあれば、地域の全ての経済的・社会的な問題を解決できると期待していたが、現在ではこれは非現実的であるとの認識が広まっている。

極東地域の対外経済活動の内、最もダイナミックな発展を見せているのは貿易である。ここ5年間に極東地域の年平均の貿易総額は倍増し、56億ドルにまで達した。そのうち、輸出は58%、輸入は42%を占めており、輸出額は輸入額を10億ドル上回っている。主要相手国は、貿易全体に占める貿易額の割合の大きい順番に挙げると、日本、韓国、米国及び中国となり、4ヶ国で全体の80%を占めている。日本企業はトップであり、23.8%を占める。

しかし、ここ5年間の日本との貿易は不安定な変動を見せている。貿易額は、ピークの1995年には13億ドルにまで達したが、1996年にはその80%に減少し、1997年には同じく90%になるなど不安定である。

貿易は経済発展の重要な要素であるが、投資誘致も経済成長のために必要な条件である。現在、国内の投資能力は限られているため、主に外国の資金源に期待している状況である。更に、近年の世界経済の動向を見ると、投資の成長率が貿易の成長率を上回る傾向が現れてきている。例えば、貿易増加率がGDP成長率の2倍である場合、投資額の増加率は3倍となる。極東地域の現状を見ると、ここ5年間の投資総額（内外）は地域GDPの5.3%、その内開発向けの投資額はGDPの2.4%と極めて少ない。

極東経済における外国投資の対GDP比率は0.47%しかない。日本企業による投資額は平均的に外資総額の10%を占めており、GDPの0.05%である。日本からの投資は、1994年をピークに減少し続けており、1997年には1994年の43%まで減少している。このような状況では、日本からの投資が極東経済において大きな役割を果たしていると言えない。世界的に見ると、国の経済開発を活発化させるには、投資総額に占める外資の割合は10~12%を超える必要がある。

極東の資源の大規模な間輸出と比べると、極東経済における外資の役割の低さが更に目立つ。例として漁業を挙げると、ロシア全体の海産物の60%を生産している極東の漁業企業の状況は、大統領府及び大統領監督総局の注目を集めほど悪化している。これらの機関が行った監査の結果によると、毎年14.26億ドルの海産物が税關に登録されずに輸出されている。ある専門家によれば、その金額は25億ドルを超える。従って、海産物の間輸出額だけで、ここ5年間に誘致した外資総額（8.47億ドル）を数倍上回っている。

また、所得を隠匿したり、連邦法に違反するなどの、日露経済関係に悪影響を及ぼす行為を行っている外資企業も存在する。例えば、1995年にカムチャッカ水域で漁業を行った23隻の外国漁船の内20隻が何らかの違法行為を行い、1996~97年に同漁場で操業した全ての外国漁船

¹本稿は1998年5月19日に東京で開催された「第17回日ロシンポジウム」にて発表されたものである。

(34隻) が法に抵触する方法で漁業を行った。これらの違法行為による損害は1,000万ドルにも上った。それに加え、日本、韓国及び米国の船主は罰金や損害賠償を回避しようとする。1997年に日本の漁船は国連総会の決議により1991年から禁止された流し網を使用した漁法で6,500トンの紅鮭をとり、これが紅鮭の資源を急減させ、カムチャツカ川の水産企業を倒産の一歩手前まで追い込んだ。

ハバロフスク地方で日本の資金を導入した企業の内、70社は円滑に活動しているが、合弁企業の定款資本が満たされていない企業、脱税などの違法行為を行っている企業もある。例えば、定款資本を満たしていないため、15社の合弁企業の設立が認可されず、「Okhotsk Suisan」と「Zuki Kokusai Koeiki」という2社が閉鎖された。税務署によると、21の日本資金導入企業の連邦予算及び地方予算への税金未納額は700万ドル以上である。

これら、外国資本に関する消極的な例を挙げる目的は、上述の現状に対する責任がすべて相手側にあると主張することではなく、まずロシア側において外国企業の円滑な活動のための条件が整備されているかどうか分析するためである。極東ザバイカル地域の各州・地方の行政府は外国企業活動のための良好な環境整備を目指して様々な対策をとっており、特に法律基盤の作成及び税制の緩和などに焦点を絞っている。極東の殆どの州・地方では、税制面での優遇措置が法的に整備されている。近い将来、極東ザバイカル協会が各州・地方の投資活動に関する法律を統一し、極東全体における統一法律基盤を整備する予定である。

極東ザバイカル地域長期発展プログラムに従って、地域の優先的な投資プロジェクトが選定され、連邦政府及び地方政府はこれらのプロジェクトの実施に係る外国投資に対して保証を行う用意がある。我々は、ハバロフスク地方への外国投資の誘致を目指して毎年国際投資会議を行っている。1997年の会議は燃料エネルギー産業及び資源開発への投資に焦点を絞り、1998年の会議は輸送産業及び通信業への投資というテーマで行う予定である。

極東地域には1,200社以上の外資系企業があり、そのうち、663社がハバロフスク地方で活動している。これらの数字は、極東経済への投資が成功し得ることを示している。現在、アメリカの資金を導入したいいくつかの大規模なプロジェクトが実施されている。それはマガダン州の「クバカ」投資プロジェクト及び林業、通信、インフラ開発に関するプロジェクトである。

また、「サハリン-1」及び「サハリン-2」プロジェクトは、既に4億ドルが投資されている。日本輸出入銀

行の融資（人道支援）は、ユジノサハリンスク空港の建設（6,500万ドル）、サハ共和国（ヤクート）での病院建設（6,100万ドル）、ハバロフスク市のベビーフード工場のための設備・機械の購入（1,250万ドル）、及びナホトカ経済特区の給水・電力供給システムの整備（8,100万ドル）に向けられている。

このような短い報告では極東における全ての対外経済活動の問題に触ることはできないが、極東地域において発展が進んでいる地方の知事として、自分の経験を通じたハバロフスク地方における対外経済活動の現状について説明してみる。

ハバロフスク地方では、60の連邦プログラム及び20の地方の経済分野別のプログラムの実施を管理・調整する経済構造再建プログラムが作成され、順調に実施されており、同プログラムには、外国投資家への優遇措置が導入されている。また、外国投資家に追加特典を与える「ハバロフスク地方における投資活動に関する法律」を作成し、今後審議される予定である。

ハバロフスク地方で特にその発展が優先される経済分野は、燃料・エネルギー産業、輸送、通信、林業、鉱業、漁業及びハイテク産業である。軍需企業の課題は、軍需製品の輸出を拡大しながら、企業熟練従業員と科学的な能力を保持し、その能力を効果的に利用できる民需経済分野を探し出すことである。その好例として、ある軍需企業が「LG」社と合弁でテレビを生産している例がある。この企業で生産するテレビは韓国の本社のテレビより安く、品質が高い。韓国製のテレビの保証期間は2年間であるが、ハバロフスク地方の工場で作ったテレビのそれは3年間である。これは、従業員及び生産技術の水準が高いことを示している。

ここ5年間でハバロフスク地方の経済に導入された外資総額は3億ドルである。しかし、最近は外資の流入が若干減少し、いくつかの重要性の高いプロジェクトは実現できなかった。例えば、日本側はいわゆる「KS-4」林業関連の合意書に調印しなかった。

それと同時に、全体的にはハバロフスク地方への外資の誘致は良い状況にあると言える。具体的に言うと、「Pioneer Group」と共同で5,300万ドルのプロジェクトを実現した。また、マレーシアの「Rimbunan Hijau Group」は100%同社資金の会社を設立し、地方の林業に9,000万ドル（うち、1998年は2,500万ドル）を投資する予定である。

1997年にアムール造船工場は海上の石油採掘プラットフォーム用の水中土台の製造の注文を受け、「サハリン-2」プロジェクトに参画している。また、一連の軍需企

業は海外企業の発注により、危機状態を克服する傾向が現れた。「Vostok Metal」、「Mir Metal」などの合弁企業は、地方政府の支援を受け、活発に生産を行っている。「Amur Trading」合弁会社は、仲裁裁判所が選任した管財人による管理の結果、未払い危機を克服し、納税及び借入金の返済を始めた。1997年には一連の外資導入企業は生産及びサービス提供を大きく増加した。例示すると、「TeleRoss-Khabarovsk」（通信サービス、13倍増）、「Forest Starma」（木材生産、19倍増）、「Aeroservice」（航空輸送、1.9倍増）、「Mirmetal」（鉄屑再処理、21倍増）、「Daltelecom」（通信サービス、13倍増）及び「Parusビジネスセンター」（ホテルサービス、14倍増）などが挙げられる。

最後に、日本との関係を阻害する、両国政府が解決すべき問題に触れてみる。海外・国内の専門家及び実業家の見解によると、ロシアにおける海外企業の活動を妨げる要因として以下のことを挙げられる。

1. 政治的・経済的な不安定
2. 整備されていない法律基盤
3. 領土問題があり、平和条約が締結されていないこと
4. 投資に対する保証の不足

5. EUのように税関規則を統一する必要があること
6. ビザ手続きの簡素化が必要であること
7. 日本政府による極東地域、ロシアに進出する企業に対する効果的な支援が必要であること

上述の問題を解決できれば、極東ロシアのアジア太平洋地域との経済協力も更に円滑に進むと思われる。

日本と極東ロシアは地理的に近く、歴史的にも密接な関係があった。今後も我々は両国間の善隣関係及び相互協力の一層の発展に尽力しなければならない。

人類は21世紀の入り口に立っており、極東ロシアの人々は、新世紀のアジア太平洋地域における極東の位置と役割を明確にしたいと考えている。この目的を達成すべく、6月1日～6日にハバロフスク市で「世紀の境の極東」会議を開催する予定である。主催者はハバロフスク地方の行政府、極東ザバイカル協会及びロシア科学アカデミー極東支部であり、ロシアの著名な経済学者が出席する予定である。

日本は、隣国かつ伝統的なパートナーとして、ロシアとアジア太平洋地域の諸国との関係の一層の発展と、極東とこの地域の統合プロセスに大きな役割を果たすことを確信している。

Far Eastern Russia and Japan: Prospects for a Good Neighborhood (Summary)

Viktor I. Ishaev

The Head of Administration of the Khabarovskiy Krai,
The Chairman of the Council of the Interregional Association of Economic
Cooperation "Far East and Zabaikalie"

The Russia-Japan 'no-necktie' summits that took place in 1997 created a basis for mutual understanding and, therefore, greater hopes for active economic cooperation. This is very important for those who live in Far Eastern Russia because of the long standing economic links with Japan, particularly in the mining, timber, and fishing industries. These links can help to revitalize the economy of the region.

The reform process in Russia is uneasy, and in Far Eastern Russia there are many specific problems. To improve conditions for economic growth, the long-term Federal Program for Economic and Social Development of the Far East and Trans-Baikal Regions was adopted.

One among this Program's goals is the economic opening of Far Eastern Russia to the Asia-Pacific region in terms of trade and investment.

In the last five years the average annual volume of foreign trade (mostly with Japan, South Korea, the United States, and China) doubled, reaching US\$5.6 billion,

while the trade surplus was about US\$1 billion. Although Japan still leads the way, trade volumes fluctuate and were lower in 1996-1997 than in 1995. Also, the regional economy needs more development funds but domestic sources of investment are quite limited and foreign investment could play a much bigger role in the development of the Far Eastern provinces.

However, at present the influence of foreign investment in the area is about US\$847 million which does not exceed 0.5 percent of the regional domestic product. The investment made by Japanese companies accounts for about 10 percent of the total foreign investment accumulated in 1992-1997 and, to our regret, the annual volume in 1997 was only about 43 percent of the 1994 peak level.

The modest level of foreign investment in Far Eastern Russia is in sharp contrast with the large-scale consumption of the natural resources of the region, including illegal transactions. In the fishing industry, according to various sources, unaccounted exports can be

estimated at US\$1.5-2.5 billion. In 1995, for example, out of 23 foreign boats that were catching fish in the Russian EEZ of the Kamchatka Peninsula, 20 violated the rules, and in 1996-1997 all 34 foreign vessels breached the law with the total loss estimated at US\$10 million. In 1997, Japanese boats caught 6,500 tons of salmon using internationally forbidden drift net technology thus undermining the production base of several Kamchatka-based enterprises.

Regrettably, some foreign companies hide their profits and violate Russian laws. Among 70 enterprises with Japanese capital registered in Khabarovskiy Krai some made attempts to avoid taxes and default on US\$7 million in payments to regional and federal budgets, others were liquidated or lost their registration.

To sum up, we are not blaming foreign businessmen for these problems, but must analyze what the local authorities can do to help them to work more productively. Almost all the provinces of the region introduced some tax concessions, improved their laws, developed transport communications, built new hotels, and improved business infrastructure. The Council of the regional association "Far East and Trans-Baikalia" plans to unify the legislation of various provinces thus creating better legal and business environments for the entire region. Investment promotion conferences facilitate the flow of information. Moreover, there are some priority investment projects where foreign investor's interests can be protected by guarantees provided by the federal and local authorities.

There are more than 1,200 enterprises with foreign investment registered in Far Eastern Russia, including

663 in Khabarovskiy Krai. The funds invested in the Sakhalin-1 and Sakhalin-2 projects are estimated at US\$400 million. The resources of the 'humanitarian credit' by the Export-Import Bank of Japan were directed at the construction of the airport in Youzhno-Sakhalinsk, the hospital project in Yakutia, the baby food factory in Khabarovsk, and electricity and water supply projects in Nakhodka.

Foreign investors are welcomed in Khabarovskiy Krai where they can already enjoy some benefits but will get more advantages when the provincial-level investment legislation will be enacted later this year. In 1997, total exports of joint ventures based in the province increased by 30 percent. With about US\$300 million of accumulated foreign investment in Khabarovskiy Krai, our priority areas for development are fuel and energy production, transportation and telecommunications, timber, fishery, and mining industries, advanced technologies and conversion of the defense enterprises.

Finally, foreign and Russian experts, as well as business people involved in foreign trade and investment activities indicate some impediments that complicate cooperation between Russia and its neighbors, including domestic political instability and economic problems, an incomplete legal environment and lack of investment protection, territorial dispute, complex visa and customs procedures, etc.

It could be very helpful if the Japanese government can extend more support to the Japanese companies that invest in Far eastern Russia. This, along with the progress in other areas that were mentioned will enhance Russia's economic ties with Japan and the Asia-Pacific region.

韓国経済の再跳躍

韓国開発研究院 前副院長 嚴 峰 成

1997年11月の外貨準備危機に端を発する韓国の経済危機は、IMF支援融資を契機として一つの峠を越した。その後、短期対外債務の期限延長、外国為替平衡基金¹債券の発行が成功したこと等により、国家破綻の危機は一応収束したと見ることができる。しかし、経済危機が完全に解消された訳では決してない。我々の対応如何によってはいつでも再発する可能性が常に存在しているのである。

この6ヶ月間、韓国政府と国民は経済危機克服のために最大限の努力を重ねてきた。特に1998年2月に新たに発足した新政権は「経済危機克服」を最優先課題とし、このためにすべての力を集結している。発足当初から非常に意欲的な改革政策を推進し、国際社会からの信頼を回復しつつあることは非常に望ましい現象として評価される。韓国経済の構造改革のための苦しい長期戦の第一歩を踏みだしているのである。経済構造調整についてのマスタープランが準備され、これに基づいた細部推進計画が順調に進行している。

韓国経済のIMF支援融資以降の6ヶ月を振り返り、経済危機を克服するための努力を評価してみると有意義であると考えられる。本稿では、現在韓国政府が推進している構造改革のための重要施策について概観し、韓国経済の再跳躍を展望してみることとする。

1. 韓国経済の最近の動きと展望

IMF支援融資以降における韓国経済の最も大きな特徴の一つとして実物経済の急激な萎縮があげられる。全般的な消費心理の萎縮から内需不振が深刻化しており、これが企業活動の停滞につながって実物経済の景況が急激に悪化している。これに伴い、去る1998年第1四半期（1～3月）の経済成長率は1980年以降初めてマイナス成長を記録した。第1四半期の民間消費と設備投資は各々-10.3%、-40.7%も減少しており、激しい内需不振を反映している。特に、これまで韓国経済成長の牽引車の役割を果たしてきた製造業の停滞が目立っており、問題の深刻さを際立たせている。

1997年末から米国ドルに対するウォン相場が急速な低

下傾向を示したことによって輸出条件が大幅に好転したが、貿易金融に支障が生じていることが制約となり、輸出の大幅な増加が不可能となっている。もっとも、内需停滞に伴い原資材及び資本財輸入が大幅に減少したため、貿易収支は1998年1月から5月までの累計で174億ドルの黒字を記録している。経常収支についても、貿易収支改善が寄与して1998年5月までの累計で184億ドルの黒字を記録し、前年同期における▲99億ドルの赤字に比べて何と283億ドルも改善した。しかし、このような貿易収支と経常収支の大幅黒字化は、輸出回復や景気活性化とは無関係なものであり、黒字基調の定着と判断するのは早計であるように考えられる。

IMF体制以降、最も急激な変化を見せてているのは労働市場である。これまで韓国において失業が社会問題に飛び火した事例はなかった。高度成長を続けてきたことを反映して、需要超過型の雇用構造を維持してきたためである。しかし、最近ではこうした2%台の低失業率を前提とした構造が崩れている。わずか6ヶ月で失業率が6%にまで高まっており、高失業率状態が現実のものとなってきているのである。雇用保険等の社会保障システムが不完全な状態の下で、短期間に発生した高失業率状態が社会問題に飛び火する惧れが拡がっている。

深刻な内需不振と併せて韓国経済が直面しているもう一つの問題は、IMF支援融資の前提条件である高金利が企業の資金調達難に拍車をかけ、企業活動を困難なものとしているという点である。資金繰りは多少緩和されてはいるが、IMF支援融資とともに始まった高金利体制は企業の資金調達を困難なものとしている。これを反映するよう、1998年4月までの倒産発生件数は1万件を越えている。

そして対外的な条件も韓国経済にとって向かい風となっている。1997年末には1ドル当たり130円であった円相場は6月15日現在で146円にまで低下した。このような円安傾向は、韓国の主力輸出商品の価格競争力を低下させ、経済全体の成長率を鈍化させることが懸念される。さらに、中国人民元の切下げの可能性も韓国経済にとって悪

¹自国通貨価値の安定を図り、投機的な外貨流出入による為替市場の混乱を防止する目的から、政府が直接的または間接的に為替市場に介入して為替売買を行うために設立された基金。所要資金は主に外国為替平衡基金債券を発行して調達しており、資金の運用は韓国銀行、国内外為替銀行、外国金融機関などに決済資金として使用されている。

材料として作用するものと考えられる。

このような対外条件の悪化とともに、IMFショックに伴う消費、投資等の内需停滞の深刻化から、1998年のGDP成長率はIMFと合意した-1%の水準よりもさらに低い-4%台にまで大きく低下する見通しである。特に、金融機関及び企業の構造調整が本格的に進めば、信用不安と雇用不安が重なって景気停滞はさらに深刻化するだろう。しかし、構造改革が順調に進めば、1999年以降には対外信頼度の回復とともに信用不安が解消され、消費、投資等の内需回復を基礎として成長率が回復する見込みである。特に、2000年からは+5%台の成長が可能と考えられる。

もし、金融機関を含む構造調整が急速に進んだ場合、韓国経済はこれまで経験したことのなかった高失業率状態に直面するようになるだろうが、経済が回復し、企業の投資活動が正常化するのに伴い7%台の高失業率は低下すると考えられる。しかし、構造調整が遅れれば遅れるほど高失業率状態は長期化し、国民が負担しなければならない費用と苦痛は増加するだろう。

このような実物経済の停滞とは異なり、対外部門では経常収支が1998年中で300億ドル以上の大幅黒字を記録する見通しである。外貨準備危機を経験した韓国にとって経常収支の黒字は経済危機克服の大きな力となると考えられる。もちろんその内容を見ると、輸出増加よりは輸入減少に起因するものであり、多少失望させられる面もある。しかし、これまでの3年間に経常収支赤字の規模が▲400億ドルに達したことを考慮すれば、300億ドルを超える経常収支黒字はかなり評価し得るものと言えよう。

1997年末のウォン／ドル為替相場の急落に伴う輸入物価上昇は国内物価上昇につながったが、1998年上半年には国際原材料市況の安定、為替相場の安定等により上昇傾向が著しく鈍化している。さらに、賃金下落等費用要因も物価安定にとって好材料として作用しており、景気停滞による総需要圧力の鈍化も物価安定に寄与している。

2. 韓国経済の構造調整

現在韓国経済が直面している経済危機を克服しうる唯一の方策は、金融、企業、政府等各部門における徹底した構造調整であるという共通認識が形成されつつある。今我々に必要なことは、どれだけ短期間に、患部を切り取って経済を回復させることができるかということである。

ある。時間が遅れれば遅れるほどもっと多くの苦痛と費用を支払わなければならないだろう。

韓国経済の先行きは構造調整の速度に依存していると言っても過言ではない。韓国政府もこの問題についての重要性と深刻性を認識しており、構造改革に全ての力を集中している。経済の各分野の改革のためのマスタープランを準備し、推進している最中である。

(1) 金融構造調整

金融構造調整の基本方針は、金融システムの安全性を確保し、金融機関の健全性と業務の効率性を向上させることに重点を置いている。このためには、優良金融機関を積極的に支援する一方で、経営不振の金融機関は早期に整理することにより構造調整を促進し、金融機関本来の資金仲介機能を回復して金融機関の審査能力・リスク管理能力を向上することが必要である。このような金融構造改革は明確な計画と手順によって推進されつつある。特に、IMF・IBRDとの合意事項については誠実かつ順調に推進しており、一部ではこうした国際機関が要求している以上に徹底した構造調整が進められている。

第1に、金融業の構造調整のための制度整備を完了しており、韓国銀行法を含む金融改革関連13法案を制定または改正した。併せて、不良債権整理基金を新設して20兆ウォン規模の財源を拡充したほか、預金保険機構を統合して金融監督委員会を設置する等、本格的な金融構造調整に向けての布石を終えた。

迅速な金融機関の構造調整のために、成業公社²が14兆ウォンの金融機関不良債権を買い入れたほか、経営不振が深刻化したソウル銀行と第一銀行に対して各行当り1兆5千億ウォンずつ出資して資本金を拡充し、当該銀行の早期民営化を推進している。また、経営不振に陥った総合金融会社及び証券会社についての業務停止と認可取り消しを行ったほか、BIS自己資本規制比率8%に未到達の12銀行に対して経営改善命令を発出し、経営改善計画書の提出を命じた。銀行が提出した計画書に対する評価に基づいて、経営改善の可能性が薄い5市中銀行について営業停止を命ずるとともに、資産・負債引き受け方式で優良銀行へ営業譲渡を行うことによって事实上閉鎖させた。併せて、今回の閉鎖対象の残り7銀行に対しては徹底した自力再建努力を含む経営改善命令を発出し、1ヶ月以内に経営革新及び資本金補強条件を含む行動計画

² (ERINA注) 韓国産業銀行や一般銀行から融資を受けた企業のうち、債権回収が困難で継続融資または投資が不適合と韓国産業銀行が認定した企業に対する銀行の債権および債権の弁済を受けるために銀行が引き受けた物件を整理するために設立した公法人。主要業務は、①銀行から継承した債権の保全と調査、②銀行が当該債権の弁済を受けるために引き受けた物件として銀行から継承した財産の管理と処分、③前記の2業務に付帯する業務として韓国産業銀行裁決の承認を得た業務。

書を提出するように命じた。

韓国政府は、金融機関構造調整のために必要な50兆ウォンの財源を、債券発行を通じて調達する方策を準備した。この財源は不良債権整理を目的とした「不良債権整理基金債券」25兆ウォンと、金融機関の増資支援と預金払い戻しを目的とした「預金保険基金債券」25兆ウォンを発行することにより調達することになっている。この財源に基づいて韓国の金融構造調整が急速に進むものと考えられる。

一方、銀行と総合金融会社についての健全経営基準を整備し、銀行は2000年末までにBIS自己資本比率10%、総合金融会社は1999年6月末までに8%へ到達することを義務付ける予定である。

また、証券会社と保険会社についての資産運用の健全性を大幅に強化し、経営正常化を図っていく予定である。

(2) 企業構造調整

新政権は発足以前から既に企業構造調整に着手している。1998年2月に経営透明性の向上、相互債務保証の解消、財務構造の改善、重点部門の設定と中小企業との協力強化、支配株主と経営者の責任強化等の「企業改革5大課題」を選定し、30大企業の実践約束を導き出した。この課題の一部は法改正を通じて実現化されたものもある。

経営の透明性向上については、連結財務諸表を1999年会計年度から導入することにしたほか、上場法人の社外理事選任を義務付けることとした。また、株式会社の外部監査に関する法律を改正して上場法人と大企業グループについての外部監査人選任委員会の設置を義務付け、外部監査人及び会計管理人の責任を強化した。

相互債務保証の解消については、公正取引法を改正して2000年3月までに既存の債務保証を解消させることとしたほか、銀行の相互債務保証要求行為を禁止するために金融監督規定を改正し、新規の債務保証が発生しないように監督を強化することにした。

財務構造の健全化を進めるために、主取引銀行と取引企業の間で財務構造改善に関する約定を1998年4月末までに締結した。この約定は負債比率縮小計画、系列会社統廃合整理等の構造調整計画などを含むものとなっている。また過大な借入金についての損費否認制度³を早期に実施できるように法律改正を完了したほか、有償増資要件を廃止して企業の資金需要に弾力的に対応できるよう

にした。

支配株主と経営者の責任性を強化するために、株主代表訴訟等少額株主権の行使要件を緩和した。外国人による敵対的M&Aを部分的に許可し、25%以上の株式を取得する場合にはその50%以上を公開市場から買い入れることを義務付けている「義務公開買取制度」を廃止した。また、会長あるいは大株主が事実上経営に介入している場合に、その経営責任を追求することを可能とするため「事実上理事制度」を導入することにした。

このような改革諸措置が具体化されれば、企業構造調整のための制度的環境がかなり整備されることとなる。このように、政府の役割は原則的に企業構造調整のための制度的環境を整備することに限定されるべきであり、実際の企業構造調整は健全な金融機関の主導により進められることになるだろう。政府が企業構造調整に介入して失敗した過去の経験を教訓とし、経営不振に陥った企業が市場原理によって退出させられるようにするということが政府の方針である。

これに伴い、去る1998年6月18日には、5大財閥系列企業を含む55もの整理対象経営不振企業名簿を発表して市場から退出させたことをはじめとして、経営状態が不安定な企業に対する本格的な構造調整を断行した。5大財閥に対しては、7月末までに具体的でかつ実現可能性のある内容で既存の財務構造改善約定を再編成し、これを基本として企業構造調整を推進する予定である。5大財閥を除いた残り64大系列の場合には、7月15日までに8行の大型銀行で各行2系列ずつ構造調整対象系列企業群を選定することとし、それ以外の大企業及び中堅企業については8大型銀行で10社ずつ選定し、企業の申請を受けて遅くとも9月末までに系列企業についての1次的な構造調整を完了する予定である。

(3) 労働市場の構造改革

労働市場の改革は労働力の自由な移動を可能とする「整理解雇制」の導入を契機として急速に進んだ。M&Aを含む緊迫した経営上の必要がある場合に限り、解雇回避努力、公正な対象者選定、労働者との協議を経た上で雇用調整を可能とするようにしたほか、専門知識、技術、経験を要する業務に対する労働者派遣を認める立法措置を完了した。今後の労働市場改革の方向は、労働市場の柔軟化のために整備した制度的環境が合理的に運営されることができるように、合理的慣行と条件を醸成するこ

³ (ERINA注) 過大な借入金に係る金融費用の税法上の損金算入を税当局が否認できる制度。

とに重点を置かれるべきであろう。労働市場の柔軟性向上とともに労働者の権益増進にも力を傾けなければならない。これと併せて構造調整過程で発生する失業者のための雇用インフラと職業訓練・就業斡旋にも政策的配慮を惜しまないようにしなければならない。現在政府が推進中である失業対策の実効性を高め、失業者に対する実質的な援助を行えるようにすべきである。

3. 國際社会の支援

韓国経済は生まれ変わるために苦痛と試練を被っている。過去の高度成長の副産物である金融機関と企業の経営不振を解決するための苦痛を伴う構造調整を推進している。大量失業と急激な成長鈍化は、成長神話に慣れた韓国人がかつて経験できなかった衝撃そのものであった。整理解雇、銀行の閉鎖、大企業の連鎖倒産など、過去には想像もできないものであった。しかし韓国人は衝撃から脱け出して現実を認識し始めた。苦痛を伴う構造調整に踏み出しているのである。

国際社会は韓国経済の再建を支援すべきである。一方的な支援ではなく、相互利益の原則の下で韓国経済の回

復をサポートしなければならないということである。

これはかつて開発途上国の希望でもあり、モデルでもあった韓国経済を回復させること自体が、経済力格差が拡大している先進国と開発途上国、すなわち南北問題を解決する試金石となり得るためである。

IMF支援融資申請時に議論された先進国の第2線資金支援を含む協調方策も実行されるべきである。これによって韓国の国際社会における信頼度を回復するとともに、外資誘致も可能となると考えられるからである。

韓国経済の復活は経済構造調整にかかっている。改革の方向は既に決まっている。躊躇している時間がないということを国民は十分に認識している。経営不振企業と金融機関を閉鎖させる構造調整を本格的に推進している。このような改革作業に国際社会も手を差し伸べるべきである。そうすることによってこそ、韓国経済が新しい姿に生まれ変わり、新たに国際社会の一員として復帰できるからである。

(ハングル原稿をERINAにおいて翻訳)

嚴峰成氏の略歴

1952年3月2日生まれ。経済学博士、専門分野は金融経済学、マクロ経済学。

1974年ソウル大学商科大学卒、1982年米国コネル大学大学院卒。

経済企画院副総理諮問官、財務部長官諮問官、韓国開発研究院研究調整室長、同マクロ経済チーム長、同副院長を歴任した。この他、金融産業発展審議会委員（1990年より）、韓国先物学会常任理事及び副会長（1995年より）も兼任。

Outlook for the Recovery of the Korean Economy (Summary)

Bongsung Oum

Former Vice President, Korean Development Institute

Korean Economy in Brief

With the economic recovery as its principal task, the current administration of Korea that was inaugurated in February has not hesitated to apply all means at its disposal towards achieving this end. Indeed, encouraging signs of recovering investors' confidence can be seen as the Korean government pushes forward with active and aggressive reform efforts. The masterplan for economic recovery has been drafted and measures are being implemented as scheduled. In the following, key measures that the Korean government is currently implementing are reviewed, and the outlook for economic recovery is pre-

sented.

Current State of the Economy

The most striking feature of the Korean economy under the IMF program is the contraction of the real economy due to the fall of domestic demand. For the first time since 1980, the economy recorded negative growth in the first quarter of 1998. Despite the favorable conditions created by the depreciated won, no significant increase in exports has been observed due to the sluggish cash flow in trade finance. Although the trade balance and current account recorded \$17.4 billion and \$18.4 bil-

lion surpluses respectively during the first five months of 1998, such figures can not be attributed to the recovery of economic or export activities.

The Labor market is perhaps the most rapidly changing segment of the economy due to the IMF program. The past structure of low unemployment that kept the level of jobless in the society under 2% is changing, posing serious social side effects given Korea's relative lack of social infrastructure against such a problem.

Korea is faced with the problem of high interest rates along with depressed domestic demand. High interest rates, which happens to be one of the preconditions agreed with the IMF, are adding to the problem of lack of capital, ultimately forcing firms to close down. The number of bankrupted firms up to April was over 10,000.

The external conditions are not too favorable either. The Japanese Yen depreciated against the dollar from 130 ¥/\$ to 146 ¥/\$ by June. This made for cheaper Japanese goods that competed with Korean goods in the international markets. Furthermore, the possible depreciation of the Chinese renminbi could be detrimental to Korea as it attempts to recover from the present crisis.

Economic Outlook

Due to the fall of domestic demand and economic conditions abroad, the GDP growth rate in 1998 is expected to record -4%, far lower than the previously agreed -1% growth with the IMF. In the case of successful economic restructuring, in 1999 domestic demand and investment will begin to recover. By 2000, it will be possible to see the growth rate record 5%. In the case of unsuccessful economic restructuring, high unemployment will continue as the share of the economic burden and pain paid by taxpayers will increase.

Restructuring the Korean Economy

Financial Sector Restructuring - To achieve a safe, sound, and efficient financial system, 13 related laws have been amended including the Bank of Korea Act. In addition, 20 trillion won has been allocated for the purpose of disposing of non-performing loans, deposit insurance agencies have been consolidated, and a Financial Supervisory Commission has been established. Insolvent financial institutions and corporate firms have been ordered to exit, and 12 banks that did not meet the BIS capital adequacy ratio of 8% were suspended and ordered to submit a rehabilitation plan for review.

Corporate Sector Restructuring - In February, the so-called five major issues for corporate reform were

announced and agreed to by the top 30 corporations. To enhance transparency in corporate management, a consolidated financial statement is to be adopted by 1999 and the appointment of non-executive directors is made mandatory. The Fair Trade Act was revised to completely abolish mutual cross loan guarantees by March 2000 and financial supervisory regulations were strengthened to prevent future guarantees of such kind. To promote a sound financial structure, agreements were made between corporations and banks outlining plans to reduce the debt burden and streamline business structures of corporations. Laws were passed that strengthened minority shareholders' rights. M&As, including hostile M&As by foreigners, were made legal and various ceilings on foreign acquisitions were lifted. These measures will significantly alter the corporate environment in Korea, the process that was started in June by the announcement of 55 affiliates to be closed due to their financial unsoundness.

Labor Market Reform - To introduce more flexibility in the labor market, the government has so far introduced redundancy layoffs and relaxed restrictive legal provisions relating to private job placement and manpower leasing services. However, the efforts of the government are not limited just to the improvement of economic efficiency, but equity and social stability issues are being addressed as well. 7.9 trillion won is set aside to support the unemployed and employment insurance benefits have been increased and expanded to cover a broader base.

Support of the International Community

Korea is in midst of an economic crisis it has never experienced before. For a country that was accustomed to high paced growth, unemployment and bankruptcies of such massive scale came as a complete shock. Nevertheless, with the effect of the initial surprise worn away, the Korean people have accepted the reality and have come to grasp the seriousness of the present situation.

Right now, Korea needs the help of the international community, and the international community needs the Korea that was full of economic vigor and energy. For the reason of mutual benefit, the international community must lend its helping hand. The second line of defense as agreed at the time of agreement with the IMF should be provided. In turn, the government of Korea, now fully realizing that the faith of Korea depends largely on the success of its reform efforts, will implement necessary measures so that Korea can soon become a productive participant in the international community.

羅津－先鋒經濟貿易地帯¹の開発とその特徴

朝鮮社会科学院 世界経済南南協力研究所 所長 李 幸 浩

はじめに

羅津－先鋒經濟貿易地帯の開発が始まってから約6年という日々が経っている。その間、地帯の開発はスムーズに行われて一連の変化や成果が収められた。21世紀を見通しながら推進している遠大な事業、羅津－先鋒地区開発の展望は確固たるものであると言える。

この論文では羅津－先鋒經濟貿易地帯開発と関連して開発の経緯、開発の特徴、開発の状況などについて集約的に整理してみようと思う。

1. 豆満江²下流地域の開発と羅津－先鋒經濟貿易地帯

(1) 豆満江下流地域の開発構想

北東アジア諸国と地域間の経済協力を強化するに当たって重要なことのひとつは、互いに協力と交流を発展させうる拠点を定め、その地域を先に開発することである。このような拠点としては、地理的位置が有利で、見込みのある地域でなければならない。北東アジアの経済協力を図るうえで最も有利な地域として選定されたのがまさに豆満江下流地域である。

豆満江下流地域の国際的自由經濟貿易地帯への開発構想は、偉大な金日成主席が初めて提起された。

偉大な金日成主席は、北東アジア地域における豆満江下流地域の重要性を深奥に分析し、1989年2月に豆満江下流地域に国際的な自由經濟貿易地帯を作り、羅津－先鋒地区に自由經濟貿易地帯を創設するという構想を打ち出された。

その後1990年7月に中国が豆満江下流デルタ地帯に国際自由貿易地帯を創設するという構想を、1991年10月に国連開発計画が豆満江地区開発計画を提起した。

豆満江下流地域の開発は、朝鮮民主主義人民共和国(以下北朝鮮)³と中国、ロシアの国境地帯を3国を含んだ関係国が互いに協力して共同に開発する、多国間協力活動である。豆満江下流地域の開発は、当面、この地域と関係国との間に貿易と資本の投資を発展させる方向で経済協力と交流を強化し、将来この地域を北東アジアの輸送

と加工工業、金融業と観光業の発展の中心に作り上げることをその目的としている。

豆満江下流地域を開発すれば、この地域を北東アジア諸国やこの地域と世界の他地域の間を結ぶ海陸連帯輸送の要衝地、国際交通網の中心地に転換させることができるばかりではなく、この地域の経済的潜在力に基づいて北東アジア地域の全般的な経済発展を促進し、諸国間の経済協力と交流の拡大にも有利な条件を作ることができる。したがって豆満江地域をよく開発すれば、北東アジア諸国の経済発展を促進する上で大きな前進が為し遂げられ、決定的な突破口が開かれるだろう。

20～30年という開発期間を予定している長期的な事業で、インフラ資金だけでも300億ドル以上の莫大な投資が必要る。膨大なこの豆満江下流地域の開発は、まず北朝鮮の羅津、中国の琿春、ロシアのボシェットをつなぐ1,000km²の小デルタ地帯を開発し、将来的には北朝鮮の清津、中国の延吉、ロシアのウラジオストクを連結する1万km²の大デルタ地帯を開発しようとする遠大な計画である。

豆満江下流地域の開発問題が提起されてから政府クラスと民間レベル、多国間と2国間、当時国と関係国など各レベルの幅の広い実務的、学術的協議と討議が行われ、この過程で開発の必要性と重要性、その可能性を論議して具体的な開発方案と展望が提示され、いろいろな推進機構が生まれた。

豆満江下流地域では、北朝鮮の羅津－先鋒地区に経済貿易地帯を、中国の琿春に経済合作区を、ロシアの沿海地方に大ウラジオストク自由経済園を創設する活動が既に推進されており、3国の隣接地域間の交通と通信網の連結工事が行われている。豆満江下流地域に対する外国の投資も増えつつある。

今日に至って豆満江下流地域の開発は、理論的な論議にとどまらず、既に提起され合意された問題を一つ一つ具体的な行動に移す実践段階に入ったと言える。

¹ (ERINA注) 筆者によれば、「羅津－先鋒自由經濟貿易地帯」は1998年4月末より「羅津－先鋒經濟貿易地帯」と改称されたとのことである。

² (ERINA注) 「団們江」の朝鮮名。

³ (ERINA注) 原文(日本語)では朝鮮半島内の2国(Democratic People's Republic of KoreaおよびRepublic of Korea)についてそれぞれ「朝鮮」および「南朝鮮」との表記が使用されていたが、日本における一般的な国名表記に合せるため、ERINAの責任において前者を「朝鮮民主主義人民共和国」(または「北朝鮮」)、後者を「韓国」と変更した。

(2) 羅津ー先鋒経済貿易地帯創設の宣布

豆満江下流地域開発は、北朝鮮の経済建設とも関連した重要な事業である。共和国政府は、豆満江下流地域の開発問題が提起されて以来今日に至るまで、この事業に大きな関心を向け、数多くの実践的措置を探ってきた。

共和国政府は、沿岸3か国のうち最初に自由経済貿易地帯の創設を宣布した。豆満江下流の北朝鮮側の地域である羅津ー先鋒地域に自由経済貿易地帯を作るという共和国の措置は、朝鮮民主主義人民共和国政務院決定第74号（1991年12月28日）によって世界に発表された。その主な内容は次のとおりである。

- ① 羅津市の14の洞、里⁴と先鋒郡の10個の里を含む621km²地域を自由経済貿易地帯とし、地帯内の羅津港、先鋒港と隣接の地域にある清津港を自由港とする。
- ② 自由経済貿易地帯では、合弁、合作、外国人単独企業を許容し、投資国に対する制限がない。
- ③ 國家は外国人が投資した資本と財産、企業の運営を通じた所得と、他の所得を法的に保護し、企業所得税の減免をはじめいろいろな特恵措置を探る。

2. 羅津ー先鋒経済貿易地帯開発の特徴

北朝鮮に創設された羅津ー先鋒経済貿易地帯は、地理的な有利性、面積の広さ、その機能と性格において、世界の多くの国の自由経済貿易地帯と区別される独特な側面を持っている。

(1) 地理的に北東アジアの経済交流の中心地である

朝鮮半島、特に羅津ー先鋒地帯は、北東アジアの中心に位置している。北朝鮮の東北部、豆満江下流の西北沿岸に位置し、造山湾の東北端である牛岩里から120kmの海岸線に沿って朝鮮東海（日本海）に接している羅津ー先鋒地帯は豆満江をへだてて中国の琿春、ロシアのハサンと連結された国境地帯である。

羅津ー先鋒地帯にある羅津港、先鋒港、雄上港、地帯と隣接している清津港は、中国とロシアの極東、モンゴル、日本、韓国をつなぐ、経済交流の基本的拠点である。

豆満江とその海岸沿いに建設された延べ405kmの北部地区的鉄道環状網は、三峰、南陽、訓戎、豆満江駅を経て中国およびロシアとつながっており、清津～南陽間182km道路区間の会寧、三峰、サムヤンと中国の三合、開山屯、図們、また清津から穩城までの218km道路区間の元汀、柳多、訓戎、穩城が中国の敬信、琿春地区と国境橋を経てそれぞれつながっている。

このような港湾と鉄道および道路網を利用すれば、北東アジア地域への貨物と資本、人、情報の迅速な移動を保障することができる。羅津ー先鋒地帯では、飛行機では2時間、船では1日で北東アジアのすべての地域と国々へ行ける。

(2) 地帯の大きさにおいて世界一である

世界的に自由経済貿易地帯の面積は大体、200～400km²を超えていない。羅津ー先鋒地域の面積は、創設当時は621km²であったが、1993年9月に羅津ー先鋒市になる時746km²に拡大された。この地帯の中で傾斜度が20°未満の開発地域の面積だけでも230km²である。羅津ー先鋒市は羅津区域と先鋒区域に分かれており、旧羅津市の14の洞と里、先鋒郡の10個の里と労働者区、旧恩徳郡の3つの里、合わせて27の洞と里、労働者区になっている。この地帯には現在13万9千人（そのうち都市人口が10万6千人、農村の人口が3万3千人）が住んでおり、都市人口は羅津市に、農村人口は先鋒郡に集中している。

(3) 貨物中継基地、輸出加工基地、観光基地の機能を遂行する総合的な経済開発地帯であり、国際自由経済貿易地帯の一環である

この地区を豆満江下流地域開発の拠点とするために、第1に国際貨物輸送の中核的な役割を果たす中継貿易基地を作り、第2にこの地域内の既存の工業土台を効果的に利用しながら軽工業およびハイテク加工工業を中心とする加工輸出基地を構築し、第3にこの地区の有利な観光資源を整理、開発して国際的な観光休養地に作るのが三大目標であり、課題である。

まず、羅津ー先鋒地帯は、中継貿易に適切な地帯である。

この地帯にある4つの近代的な港湾は、自然的条件が有利で、施設も相当に整えられているばかりでなく、暖流の影響で冬にも凍らないので年中利用でき、干満潮の差が20～30cmしかないとため貨物積み下ろしと航海に有利である。

鉄道網を見ると、豆満江駅から羅津港と清津地区の南康徳駅までの134km区間の混合線（標準軌と広軌）を利用してロシアからの貨車が羅津港と清津地区まで直接出入りできる。南陽駅と中国の図們駅の間は複線鉄道である。三峰駅と中国の開山屯間、訓戎駅と中国の琿春の間にも、鉄橋、または鉄橋の橋脚があって、容易に鉄道をつなぐことができる。

⁴ (ERINA注)「洞」、「里」は行政区画単位。

豆満江駅にはロシアからの車両を替えて北朝鮮の境内に送りうる年間130万トン（1時間につき13両程度）能力の車両交換場、雄上駅にも車両交換施設（1時間につき8両程度）がある。

羅津－先鋒市と隣接した咸鏡北道の北部地区の道路は、清津～会寧～隱城～セッピヨル～先鋒～羅津～清津をつなぐ385kmの環状網が形成されており、この道路網を拠点として、現在、会寧、三峰、南陽、セッピヨル（柳多）と中国の当該地域の間には、日常的な往来があり、1995年には地帯の元汀と中国の闊河が再び連結された。

羅津－先鋒地帯のこのような輸送網は、中継貿易基地を形成する上で非常に有利な点である。

羅津－先鋒地帯を国際的な貨物中継基地に開発するため、ヘリポート、港湾、鉄道、道路など、交通網を整備、拡張して交通手段間の連帶輸送システムを確立し、合理的な国際交通網を形成して貨物中継輸送と関連したいろいろな便宜を図ることになる。

また、羅津－先鋒地帯は加工輸出基地としても見込みのある地帯である。この地帯には、鉄鉱石と石炭、銅、ニッケル、カオリン、マグネサイトなど非鉄金属や金属の資源が無尽蔵に存在し、200万m³の山林資源と150余万m³の砂利、180余万m³の骨材、620余万m³の砂がある。

羅津－先鋒市には、200万トン能力の勝利化学連合企業所（原油加工工場）と1万トン級までの船を年間40～50隻修理しうる船舶修理工場をはじめとする大きな工場、企業所と食料、被服、日用品、木材の加工工場など50余の中規模の工場がある。

この地帯とその隣接地域には、20万Kw能力の重油火力発電所（6月16日火力発電所）、15万Kw能力の清津火力発電所と42万Kw能力の3月17日水力発電所があり、豆満江など10余りの河川や4つの自然湖には73億m³と推算される工業用、住民生活用の水源がある。同時にこの地帯には、教育水準の高い労働者もいる。

これらの資源と経済土台、インフラ、労働力をうまく利用すれば、羅津－先鋒地帯を輸出工業基地として優れたものに変えることができる。

羅津－先鋒地区を輸出加工を基本とする加工工業基地に開発するため、軽工業を主にして重工業を結合した工業構造や加工輸出産業基地を形成し、最先端技術産業を創設することになる。

次に、羅津－先鋒地帯は観光休養地としても有望な地域である。

羅津－先鋒地区の東北側から西南側に至る約120kmの海岸には、10の端と8の湾、海辺のおよそ20ヶ所には30km

の砂浜、30ヶ所には40kmの絶壁区間があり、沖には21の大小の島がある。

この地区にはまた、先鋒アル島、海鳥繁殖保護区、牛岩オットセイ保護区、牛岩山さくら群落をはじめとする国宝的価値を持つ記念物と先鋒郡内の屈浦原始遺跡、羅津区域の草島原始遺跡など多くの古跡がある。七宝山、白頭山などの名勝地と鏡城温泉などの休養地もこの周辺にある。

このような特異な自然地理的条件と豊かな観光資源は、この地帯を国際的な観光地帯に発展させうるということを示している。

羅津－先鋒地帯を国際的な観光基地として開発するため、地帯内の観光資源から先に開発して隣接地域の観光地と連結し、白頭山と七宝山地域の観光資源も開発していくのである。そうしてこの地帯を総合的に発達した国際貨物中継基地、輸出加工基地、国際観光基地として開発するのである。

同時にこの地帯は、両隣接国の自由貿易地域との緊密な連携のもとに推進される国際自由経済貿易地帯の一環である。

羅津－先鋒経済貿易地帯の開発は、北朝鮮の独自の計画によって推進される事業でありながらも、中国、ロシアの自由経済貿易地帯との緊密な連携と協力の中でなされる国際自由経済貿易地帯の一環である。

(4) 地帯の開発が雄大で長期の事業である

羅津－先鋒地帯の開発は、莫大な資金と技術、労力と資源が要求される雄大な事業であると同時に、20年以上もかかる長期的な事業である。したがってこの地帯の開発は、開発の段階を明確に設定し、具体的な計画を立てて推し進めてこそその成果を期待しうる。

1993年3月12日に批准された国土建設総計画によると、地帯の開発を3つの段階（第1段階1993～1995年、第2段階1996～2000年、第3段階2001～2010年）にわたって行うつもりであったが、1995年3月30日に批准された国土建設総計画では、2つの段階（当面の段階1995～2000年、展望段階2001～2010年）に規定した。

経済貿易地帯としての面貌を基本的に整備する当面段階の主要開発計画は以下のとおりである。

- ① 羅津地区を集中的に開発して、地帯の拠点として作りあげる。
- ② 周辺国（中国、ロシア）と道路、鉄道を連結して総合的な中継輸送網システムを形成する。
- ③ 既存の交通網を改築・拡張し、特に羅津港、清津港、

先鋒港の能力を3,000万トンに増大させて、中継貿易基地にする。

④ 加工輸出産業基地を構築するための建設を行い、輸出加工地帯を形成する。

⑤ 地帯内と地帯外の周辺地域で観光を積極的に行う。

自由経済貿易地帯としての面貌を完全に整え、21世紀の世界の経済発展に相応する総合的で近代的な国際交流の拠点を建設する、展望段階の主要開発計画は次のとおりである。

① 羅津港、清津港、先鋒港の能力を1億トン以上に増大し、港湾を完備する。

② 中継貿易、輸出加工、金融サービス、観光の機能を果たす、総合的な経済開発地帯に作り上げる。

③ 21世紀に相応して、施設と産業構造、サービスを高度に近代化する。将来的には、羅津区域に40万、先鋒郡に60万、合わせて100万程度の住民地区の形成を予定している。

(5) 優遇水準が非常に高い

この地帯では、外国の投資家に色々な面で多くの優遇措置を探っている。

近代的な技術で国際的競争力の高い製品を生産する部門、インフラ、科学研究および技術開発のような奨励部門に投資して設立した外国の投資企業は、所得税をはじめいろいろな税金の減免、有利な土地の使用条件の保障、銀行貸付の優先的提供のような特恵を受ける。先端技術部門、資源開発とインフラ建設、科学研究および技術開発部門の企業所得税率は10%である。

地帯内の労働者の賃金水準は高くない。月当たり最低賃金の水準が80ドル（1997年6月1日以後、地帯内のレート変動により約80ドルとなった。地帯外の地域は130ドルである）である。土地賃貸料および土地開発料と建物賃貸料、委託建設費、水道使用料、電気使用料、通信料、自由貿易港料なども他の国に比べて非常に安いばかりか、一部のケースには当該料金を減免する。

外国投資企業と外国人は、必要な土地を最高50年まで賃借し、賃貸機関の承認のもとに賃貸期間の延長が可能である。奨励部門と賃貸料2,000万ウォン以上の土地開発部門の賃借者は、土地賃貸機関との合意のもとに賃貸料を5年内に分割して支払うことができる。奨励部門と地帯内に投資する対象に対しては、投資の規模と内容、経済的な効率によって、土地使用料を10年間まで免除するか削減する。土地使用料は4年間変動させず、もし変動させるとすればその率が20%を超えないようにする。

3. 羅津ー先鋒地帯の開発状況

羅津ー先鋒地帯を開発するために、開発計画と関連した国内外機関との調整および紹介宣伝、外国企業の投資誘致を担当する对外経済協力推進委員会が設けられ、外国の投資を受け付け、審議するなど、投資と関連して実務的に提起される一切の問題を受け持つて処理する部署を中央と現地にそれぞれ設置した。特に羅津ー先鋒市行政経済委員会は国家から地帯に対する行政、国土管理運営権を譲渡されて現地執行機関、地帶当局の機能を果たしながら、インフラ部門では総投資額約1,000万ドルまで、その他の部門では総投資額約500万ドルまでの対象に対し審査承認権、土地および建物賃貸権などの権限を行使する。

(1) 法システムの漸次的な整備

外国投資家の投資を保護し、速やかに行われるよう、外国投資関係法が整然と整備されつつある。

既に1984年9月に「合弁法」が発表され、続けて1990年代に入って、経済貿易地帯の特性に即して地帯内で外国投資家の自由な経済貿易活動を十分に保障するために、外国投資関係法が作成公表されるつつある。1997年12月現在、「自由経済貿易地帯法」、「外国人投資法」など53の法と規定が作成、施行されて、外国投資家のための法的投資環境が整えられている。

今後「工業所有権法」など外国投資家の投資を保護し、便宜を図るための法と規定、施行細則が、次々と作成、公表されるだろう。

(2) 主要開発状況

投資環境の整備が着実に進められ、それを踏まえてインフラのための投資に多くの力を入れている。港湾と鉄道、道路を拡張、近代化し、通信設備と上下水道施設、ホテル、住宅を建設、整備し、工業団地を新たに作り、サービス設備の整備が本格的に推進されてきている。

羅津港1号埠頭に100万トン級の1号肥料倉庫を建設し、会寧～鶴松間鉄道の電化を終え、羅津～先鋒、先鋒～元汀間など諸区間の道路を建設、整備している。清津～羅津、羅津～元汀間の光ファイバー通信網と羅津にヘリポートを整備し、羅津1号ホテルなどホテルと観光宿泊所13棟、賃貸住宅14棟を新築した。このほか延長距離89kmの境界塔とサービス事務所も建設した。

羅津ー先鋒地帯において、1997年6月1日から外国の投資を促進するための新しい方策が施行されている。その措置は大きく分けて3つに集約しうる。

① 外貨兌換券を廃止し朝鮮ウォンだけ流通するようにした。

地帯内では変動相場制に移行し、1ドルに対して200～210ウォンで交換している。

② 各企業を中央政府や地方機関から独立させて完全な独立採算制を実施するようにした。

地帯内の企業は、計画権、生産権、販売権、価格決定権など、企業経営と関連した全ての権限を与えられ、独自に企業の経営活動を行うようになる。

③ 家内サービス、家内手工業、個人副業など個人経営を許可した。

その他、元汀に自由市場を開設すること、地帯内に入る申し込みの許可を当日にすること、元汀～羅津、元汀～先鋒間の道路の舗装と新設、南陽～豆満江間鉄道の管理を羅津鉄道局に一元化すること、羅津～釜山間の定期航路の大坂への延長、羅津大学の創立などが含まれている。このような新しい措置が導入されてから地帯の開発は一層促進されている。

(3) 外国への投資状況

1997年12月末現在で111件、7億5,077万ドルの投資契約が締結され、実際には77件、6,242万ドルが投資された。企業の創設が承認されたのは合計121件、そのうち外国投資企業が86件（合弁企業52、合作企業13、外国人単独企業21）で国内投資企業が35件である。創設が承認された外国投資企業のうち、実際に運営している企業は42件

（合弁企業26、合作企業5、外国人単独企業11）である。国別、地域別投資実績では、香港、タイ、中国、シンガポールなどが目立っている。

外国の投資が強化されるにつれ、羅津～先鋒地帯を往来する外国人の数も増えている。1997年の1年間だけでも4万人（そのうち約6千人が観光客）がこの地帯を往来した。

おわりに

21世紀を展望して行われる長期的な事業である羅津～先鋒経済貿易地帯の開発は、いまだ始まりに過ぎず、その間に試験的にやってみながら、経験を積み、教訓を汲み取る時期であったと言える。

したがって今から地帯の開発を本格的に推進していくかねばならない。地帯の開発に莫大な資金と技術、資材と労力が必要な条件のもとで、国内の経済的な潜在力を最大限に動員、利用しながら資金と技術などいろいろな面で外国との緊密な連携と協力を強化していくのが重要である。

自主、親善、平和の理念のもとに、それぞれの国との健全な団結と協力が成される時、羅津～先鋒地帯の開発は成功裏に推進されるであろうし、ひいては豆満江下流地域の開発と北東アジア経済協力も活性化されるであろう。

（日本語原稿を筆者の了解を得て変更）

李幸浩氏の略歴

1964年金日成総合大学卒業、同年より社会科学院で研究生活。1992年より現職。現在朝鮮世界経済学会会長。教授、経済学博士。

（主な著作）「南朝鮮に流布しているブルジョア経済理論批判」、「多国籍企業と現代帝国主義」、「現代日本独占資本主義の構造と危機」、「チュチエ思想と現代帝国主義論」、「羅津～先鋒経済貿易地帯便覧」

「世界経済南協力研究所」の概要

世界経済、特にアジア太平洋地域および東アジア地域の経済を調査研究し、その成果を広く普及することによって朝鮮民主主義人民共和国と諸外国との経済協力を推進し、世界経済の発展に貢献することを目的として、1987年9月に設立された。

1997年の中国及び東北三省の経済概況

ERINA調査研究部 研究員 川村 和美

1997年の中国経済は“安定を保ちながらの成長を図る”といった目標に向かって進んできた。その結果、GDP成長率は当初目標の8%を上回る8.8%を記録した。また、対外貿易額は前年比12.1%の伸びで3,251億ドルへと拡大し、初めて3,000億ドル台に乗せた。特に輸出が好調で前年を20.9%上回り、この伸びが経済成長に大きく寄与したと言えよう。加えてインフレ率（小売物価上昇率）が前年の6.1%を大きく下回る0.8%に抑えられたことで、1997年の中国経済は“高成長、低インフレを実現”し、“年間のマクロコントロールの目標を基本的に達成”したと評価されている。以下では1997年の中国全体及び東北三省の経済状況を概観する。

国内総生産

第9次五カ年計画（以下、「9・5計画」）の2年目にあたる1997年の中国経済は前年に引き続き順調に発展し、「9・5計画」の目標である経済成長率8%を超える水準となった。中国全体のGDPは前年比8.8%増の7兆4,772億元となり、伸び率は前年の9.6%を0.8ポイント下回ったものの依然高成長率を記録した（図1参照）。

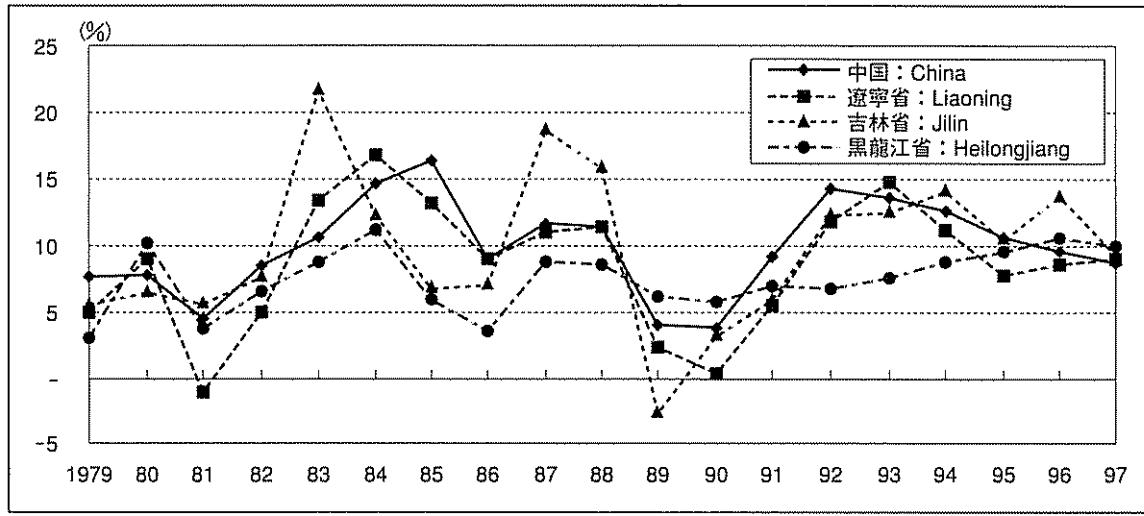
産業別にみると、第一次産業の伸び率が3.5%と低く（1995、1996年は5%台）、GDPに占める割合を前年の20.2%から18.7%に縮小させた（図2参照）。その伸びの

低さを補ったのが第二次産業（前年比10.8%増）であり、その中でも鉱工業の伸びが11.1%と高い。また、第三次産業では運輸・通信業が10.7%と高い伸びをみせた。

東北三省のGDPは、遼寧省3,501億元（全国の4.7%）、吉林省1,450億元（同1.9%）、黒龍江省2,710億元（同3.6%）となっている。三省合わせたGDPは中国全体の10.2%を占め、僅かではあるが4年ぶりにそのシェアを拡大した。GDP成長率はそれぞれ9.0%、9.5%、10.0%といずれも全国を上回っている（図1参照）。「9・5計画」ではGDP成長率の目標を三省それぞれ10.0%、10.0%、11.6%としている。

産業別にみると、各省とも第一次産業の伸びが低く、第二次、三次産業の伸び率が高いといった傾向は全国と同様である。更に部門別では、鉱工業、運輸・通信業が大きく伸びており、この点でも全国的傾向と一致している。全国的に伸びが低かった第一次産業は、遼寧省では前年比0.3%増、吉林省は▲0.6%、黒龍江省は6.5%増であり、三省とも好調であった前年（ともに10%台の伸び率）からその伸びを緩めた。運輸・通信業は、吉林省及び黒龍江省では前年比20%以上の伸び率を記し、特に好調であった。全国と異なる動きをみせたのが建設業の伸びである。遼寧省の伸びは6.8%と全国を若干下回る程度であったが、吉林省は伸び率0.0%と停滞し、黒龍江省は前年

図1 中國及び東北三省のGDP成長率の推移
Figure 1: Changes in the GDP Growth of China and the Three Northeast Provinces



出所：「統計年鑑」（全国、三省）、1997年国民経済及び社会発展統計公報（全国、三省）

Source: *Statistical Yearbook (China, Three Provinces)*, *Economic Statistics Communique for 1997 (China, Three Provinces)*

に引き続き15.7%の高い伸び率でその規模を拡大した。

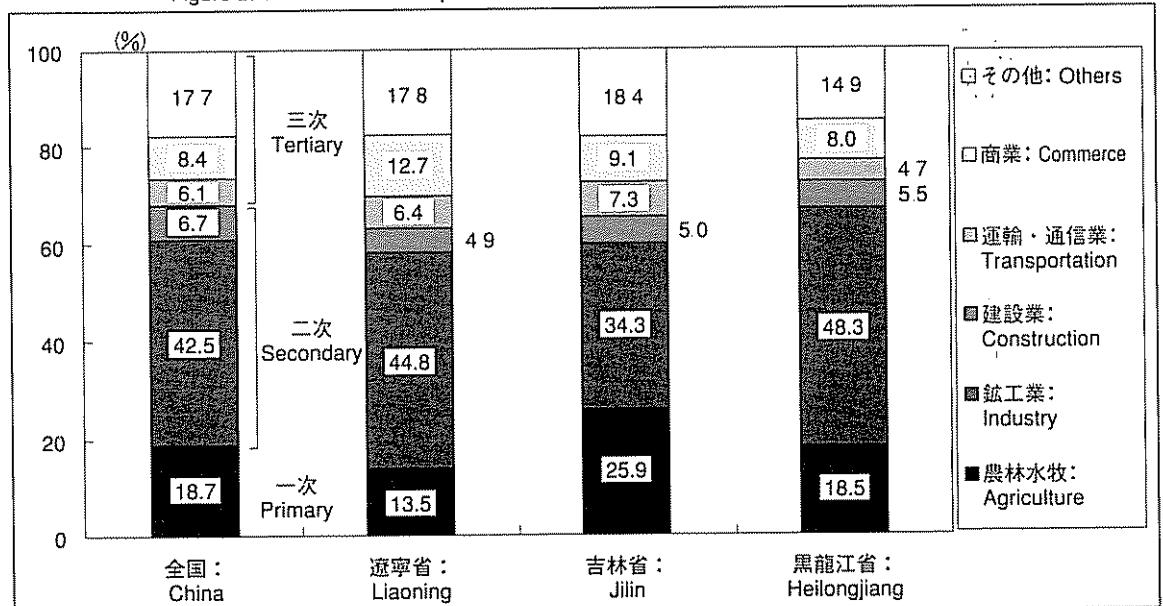
各省におけるGDPの産業構成比をみると、遼寧省は第一次産業の比率が比較的低めで、第三次産業が発達している。中国の主要食糧基地である吉林省は第一次産業の割合が高い。1997年の第一次産業はマイナス成長であったものの、GDPに占める割合は25.9%と全国平均及び他の二省を大きく上回っている。大庆油田を擁する黒龍江省は

鉱工業（特に鉱業）のウェイトが高く、第三次産業の割合が三省の中で最も低い。同省では、この第三次産業のウェイトの低さを問題点として挙げている。

インフレ率

全国の小売物価（サービス価格を含まない）及び消費者物価（サービス価格を含む）の上昇率は年間を通じて

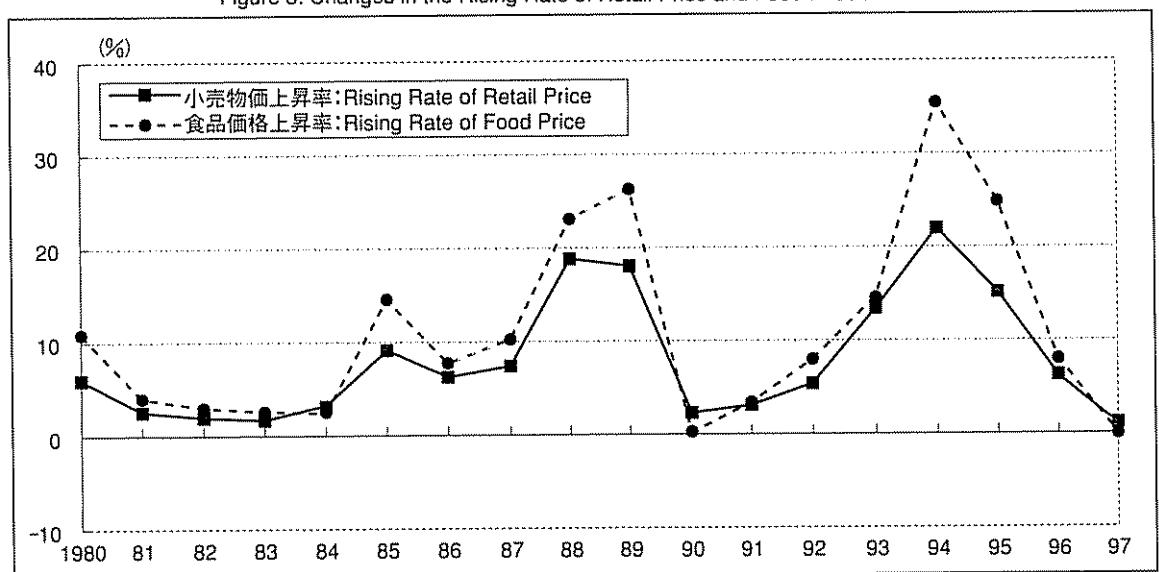
図2 中国及び東北三省の産業構成比 (GDPベース)
Figure 2: The Industrial Component Ratio of China and the Three Northeast Provinces



出所：1997年国民経済及び社会発展統計公報（全国、三省）、『中国統計摘要1998』

Source: *Economic Statistics Communique for 1997 (China, Three Provinces)* *A Statistical Survey of China 1998*

図3 中国の小売物価及び食品価格の上昇率の推移
Figure 3: Changes in the Rising Rate of Retail Price and Food Price in China



出所：『中国統計年鑑』、『中国統計摘要1998』

注：食品価格の上昇率は小売価格ベースである。

Source: *China Statistical Yearbook A Survey of China 1998*

Note: The Rising rate of food price is based on retail price

低く抑えられ、それぞれ0.8%、2.8%と改革開放以来最低の伸び率であった（図3参照）。中国では、一般に、インフレの指標として小売物価上昇率を用いている。「9・5計画」では小売物価上昇率を8%以下に抑えることを目標としているが、1997年の実績はその目標値は勿論のこと、前年の上昇率である6.1%も大きく下回る結果となつた。低インフレの実現は適切なマクロコントロールと前年に続く農産物の豊作によるものである。農産物を中心とする食品価格が小売物価全体の変動に与える影響は大きい（図3参照）。

項目別¹にみると、食品価格と交通・通信用品価格が前年を下回ったのが目立つ。食品の中では、食糧の価格が▲8.9%、卵類も▲20.7%と大きく下降した。一方、電話・郵便・交通費などを含むサービスの価格は前年を16.5%も上回り、これに次いで家賃・光熱費等の住居費も前年から8.3%上昇した。

東北三省のインフレ率は、遼寧省1.0%、吉林省1.8%、黒龍江省2.2%であった。全国平均と比べ高めに推移したもの、三省とも「9・5計画」による目標（遼寧省9.0%程度、吉林省10%以下、黒龍江省8.0%程度）を達成しただけでなく、前年の上昇率（それぞれ、5.4%、5.1%、5.1%）も大きく下回る結果となつた。

項目別にみると三省ともに、食品及び交通・通信用品の価格上昇率はマイナスを記し、一方で、住居費やサービスの価格が大きく上昇しており、全国の傾向と同様である。ただし、吉林省及び黒龍江省の食糧価格の低下の割合は比較的小さく、また住居費の伸びは三省ともに全

国を上回る10%台の伸び率となっている。さらに、水産品価格の上昇が三省に共通してみられ、その上昇率は全国平均が0.2%であるのに対し、遼寧省6.7%、吉林省8.0%、黒龍江省9.2%と高騰した。

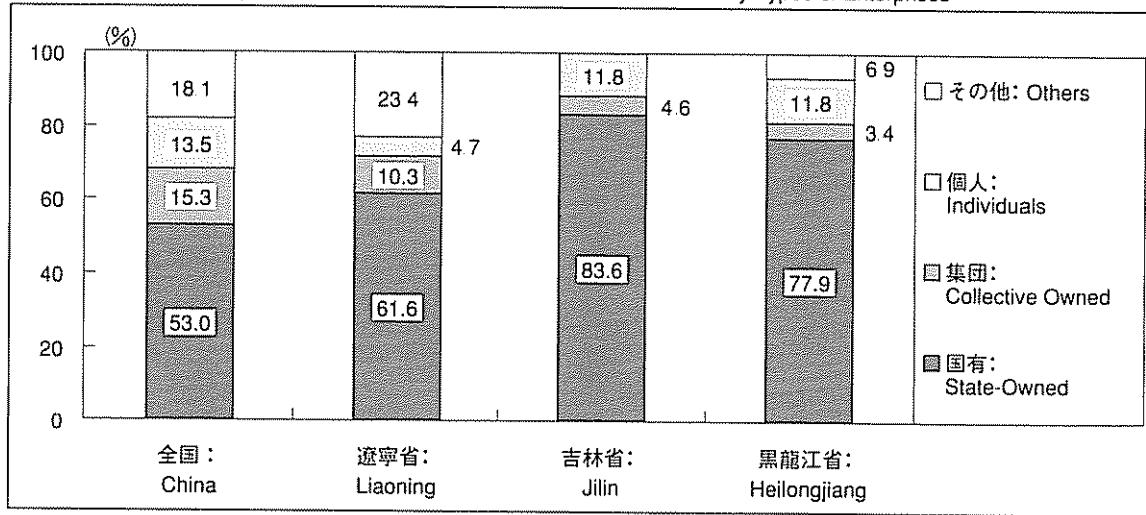
固定資産投資

固定資産投資は前年比10.1%増の2兆5,300億元であった。その53.0%を国有経済投資が占め（図4参照）、その規模は前年比11.3%増の1兆3,419億元であった。これと並んで高い伸びをみせたのが外資系等その他の経済投資であり、前年比13.2%増の4,581億元であった。一方で、集団所有経済投資の伸びは5.8%に留まった。²投資管理区分別にみると、全体の39.0%を占める基本建設投資の伸びが最も高く14.5%であった。一方、不動産開発投資は1992年、1993年と100%を超える伸び率で推移するなどバブル経済の様相を呈していたが、バブルがはじけ、1997年は前年比▲3.4%と落ち込んだ。

投資先は基盤施設や基幹産業分野を中心であった。農業・林業・畜産・漁業・水利部門への投資は前年比40%増の470億元、またエネルギー産業への投資は21.7%増の3,575億元、運輸・郵便・電信・電話業は14.8%増の3,288億元であった（1997年国民経済及び社会発展統計公報より）。

東北三省の固定資産投資額は全国の7.8%を占めるが、GDP規模（10.2%）や人口規模（8.5%）と比較するとそのウェイトは小さい。この地域には国有企業が集中しており、投資全体に占める国有経済投資の割合が非常に大き

図4 固定資産投資の形態別構成比
Figure 4: The Structure of Investment in Fixed Assets by Types of Enterprises



出所：1997年国民経済及び社会発展統計公報（全国、三省）

Source: Economic Statistics Communique for 1997 (China, Three Provinces)

¹項目別価格上昇率は消費者物価指数ベースである。

いのが特徴である（図4参照）。

遼寧省の固定資産投資は941億元で、伸び率は7.4%であった。形態別にみると、個人投資が前年比▲25.6%と大きく落ち込んだものの、外資系等その他の経済投資は前年を33.2%と大きく上回った。全体の6割を占める国有経済投資は前年比5.7%増と伸びが鈍かった。

吉林省の投資額は、1993年に伸び率67.9%を記録した以降も10%台の伸びを維持してきたが、1997年は前年比▲11.0%の351億元に落ち込んだ。形態別にみると、集団所有経済の投資額が▲35.0%と大幅に減少したのをはじめ、個人投資▲18.9%、国有経済投資▲8.8%と全ての形態を通じて投資額が減少している。中でも国有経済投資は総額の約8割を占めており、その動向が全体に与える影響は大きい。

黒龍江省は他の二省とは状況が異なっており、総額は669億元で、前年比17.8%増と急増した。集団所有経済投資及びその他の経済投資はそれぞれ▲15.0%、▲13.6%と減少したもの、個人投資が38.2%と大きく伸びたのに加えて国有経済も前年を25.4%上回り、全体の投資額は高い伸びを記した。

食糧生産量

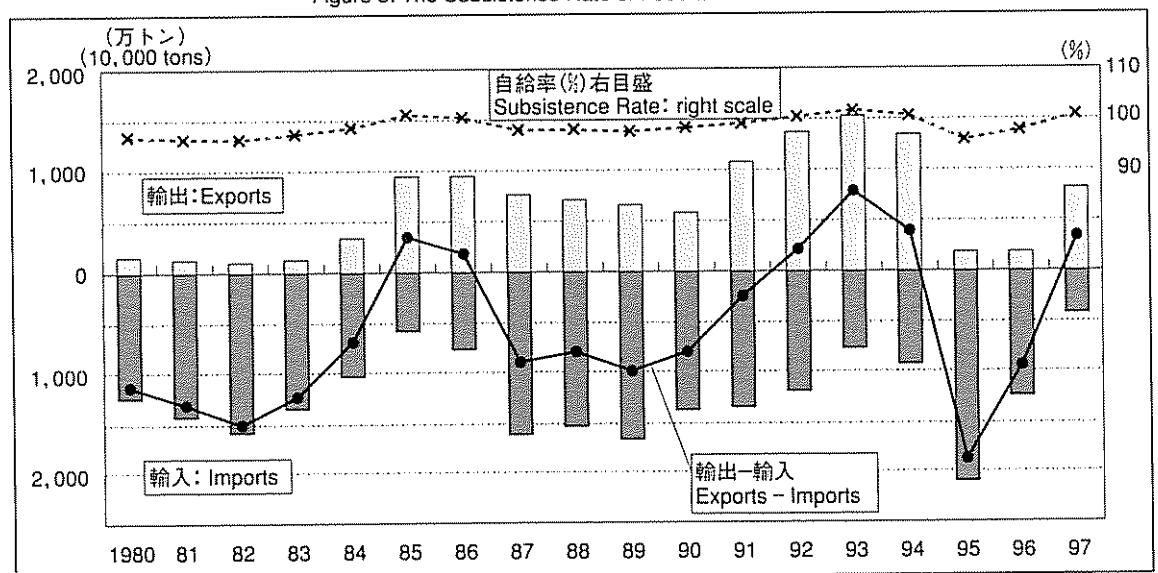
1997年における中国全体の食糧生産量は4億9,417万トンで前年の5億454万トンこそ下回ったものの、「9・5計画」における2000年の目標値である5億トンに近づき、史上2番目の豊作となった。食糧の備蓄も史上最高水準に達し

ている。1997年は、5月から7月にかけて北部地域の降雨量が少なく、大規模な干ばつに見舞われたが、その後の天候の回復と農業部門への投資の増加及び農業科学技術の普及、更に夏期収穫が好調だったことにより前年と同規模の生産量となった。これにより1995年以来3年連続の豊作となり、中国国内の食糧価格の安定につながつただけでなく、国際市況の安定にも貢献するものとみられる。また、中国の食糧の輸出量は輸入量を上回り、食糧自給率（=生産量／（生産量+輸入量-輸出量））は100.9%で、1994年以来3年ぶりに100%を超えた（図5参照）。中国の一人当たり食糧生産量は目標の400kgを達成した。

主要な農産品の生産量をみると、干ばつによりトウモロコシの生産量が前年比▲18.2%であった他、いも類の生産量も▲9.7%であった。一方、米（前年比2.9%増）、小麦（同11.5%増）、大豆（同11.4%増）などは生産量を増加させた。

東北三省の食糧生産量は、遼寧省が1,314万トン（前年比▲20.9%）、吉林省1,808万トン（同▲22.3%）、黒龍江省3,105万トン（同1.9%増）であり、三省で全国の12.6%を占める規模となる。遼寧省及び吉林省は干ばつの被害が大きく、生産量が大幅に減少した。一方、黒龍江省はトウモロコシの生産量は▲10.0%であったものの、米や大豆の生産量が3割増と好調であったため、僅かではあるが前年を上回る結果となった。

図5 食糧自給率と食糧輸出入量
Figure 5: The Subsistence Rate of Food and Food Trade



出所：「中国統計年鑑」、「海関統計1997.12」、1997年国民経済及び社会発展統計公報

Source: *China Statistical Yearbook*, *China Monthly Exports & Imports 1997.12*, *Economic Statistics Communiqué for 1997*.

工業（含鉱業）

中国の工業生産額（付加価値ベース）は前年比11.1%増の3兆1,752億元であった。企業形態別にみると、集団所有企業、外資系企業等のその他企業がそれぞれ11.7%増、13.4%増と高い伸びをみせた一方で、国有企业は5.4%増に留まった。これにより国有企业の生産額は全体の31.2%を占めるに留まり、年々そのシェアを縮小させている。

東北三省でも同様の傾向が窺える。遼寧省の工業生産額（生産額ベース）は前年を10.1%上回ったが、それは集団所有企業（前年比14.8%増）やその他企業（同21.5%増）といった非国有企业の生産額の伸びによるところが大きい。これに対して工業総生産額の半分以上を占める国有企业は2.8%の伸びに留まった。

吉林省の工業生産額（付加価値ベース）は前年比10.7%増の497億元である。企業形態別にみると、国有企业の生産額の伸びが▲2.3%で前年を下回ったのと対照的に、その他企業は18.9%と大きく上昇しており、不振な国有企业と好調な非国有企业といった状況が現れている。

黒龍江省の工業総生産額（付加価値ベース）は1,310億元であり、伸び率は9.6%であった。国有企业の工業生産額に限ると伸び率は4.4%である。非国有企业についての統計は公表されていないが、総額と全体の5割を占める国有企业との伸び率のバランスからみて、非国有企业の生産額は伸び率15%を超える好調なペースで増加したと考えられる。

東北三省は国有企业が集中する地域である。工業生産額からも全体に占める国有企业のウェイトの高さが窺える。全国の場合、国有企业による工業生産額が全体の3割程度であるのに対して、東北三省の場合は5割を超える。1998年は国有企业改革が政府活動の重点政策として挙げられており、赤字経営に悩む国有企业をその状況から脱却させることができるか注目される。この成功如何が東北三省の経済発展の一つの鍵となろう。

対外貿易

1997年の中国の対外貿易総額は3,251億ドルとなり、12.1%の伸びを記し、1983年から15年連続の増加となった（図6参照）。このうち、輸出額は前年比20.9%増の1,827億ドル、輸入額は2.5%増の1,424億ドルで、この結果、過去最高の403億ドルの黒字を記録した。このように、好調な輸出と伸び悩んだ輸入が1997年貿易の特徴である。1980年以降、輸出の伸び率が20%を超えたのは4度目であり、この輸出の拡大が1997年の中国の経済成長に大きく寄与したと言えよう。貿易総額をGDPで除した貿易依存率は

36.0%で、前年より0.2ポイント上昇している。前年から更に拡大した貿易規模は世界第10位となり、初のトップテン入りを果たした。なお、中国は2000年の貿易総額目標を4,000億ドルと設定している。

貿易形態別にみると、一般貿易が順調で、特に輸出は24.1%といった高い伸び率となった。企業形態別では、国有企业の輸出入総額が前年比12.7%増の1,637億ドル、外資系企業が11.3%増の1,526億ドルであった。ただし、外資系企業の輸入は、設備輸入関税の免税撤廃の影響を受け、その伸び率は前年の伸び（20.1%）を大きく下回る2.8%に留まった。

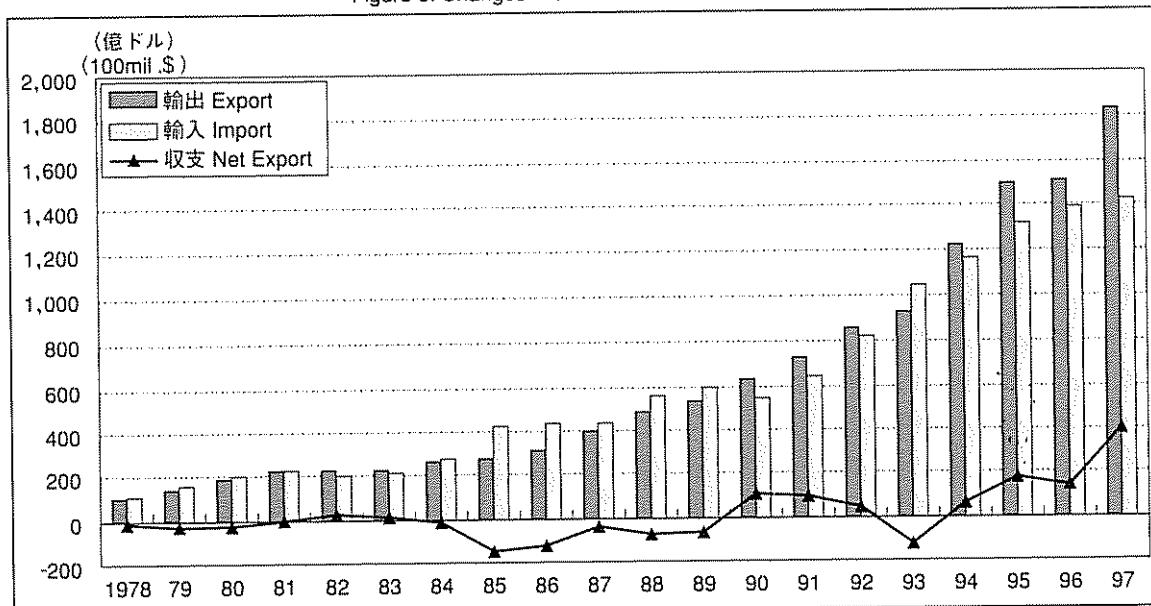
貿易相手国・地域別では、日本（608億ドル）、香港（508億ドル）、アメリカ（490億ドル）の順となっており、これら三国・地域の貿易額が全体の49.4%を占めた。第1位の貿易相手国である日本との貿易額の伸びは、日本国内の消費の不振や前述した輸入免税措置の撤廃により、前年比1.2%増（輸出3.0%増、輸入▲0.6%）と鈍かった。これに対して、香港との取引は前年比24.6%増（同33.0%増、▲10.6%）、対アメリカ貿易は14.3%増（同22.5%増、0.8%増）と好調であった。これにより、対米輸出額が対日輸出額を上回った。また、国際市場の多様化が進み、対アフリカ貿易が40.6%増（57億ドル）、中南米貿易が24.5%増（84億ドル）と拡大したのも特徴的である。

北東アジア諸国との貿易額は全体の28.3%（輸出23.8%、輸入33.9%）を占め、前年から1.9ポイント縮小した。これには対日貿易の伸び悩みが大きく影響している。他の北東アジア諸国との貿易をみると、対北朝鮮、韓国、モンゴル貿易は二桁の伸び率を記録したが、対ロシア貿易は前年比▲10.6%と落ち込んだ。

省別にみると、遼寧省の輸出入総額は149億ドル（通関ベース）で前年比6.3%増と三省の中では比較的好調であった。同省は「9·5計画」における2000年の目標貿易総額を170億ドルとしており、着実に目標値に近づいている。輸出は92億ドル（前年比6.5%増）で、このうち43億ドル（同13.1%増）が加工貿易によるものであった。同省の主要な輸出品は工業製品であり、輸出の62.1%を占める。中でも機械類の輸出が大きい。企業形態別にみると外資系企業の輸出が11.7%増の35億ドルと好調であったのに対し、国有企业の輸出は前年比2.3%増の55億ドルで、その規模は外資系企業を上回っているものの低調な伸びであった。

吉林省の貿易額は19億ドル（通関ベース）であり、前年比▲11.8%となった。同省は2000年の貿易総額目標を50億ドルに掲げているが、1994年の36億ドルをピークにその規模は縮小し、1997年の貿易総額は1992年の水準にま

図6 中国の貿易額の推移
Figure 6: Changes in the Trade Volume of China



出所:「中国統計年鑑」、1997年国民経済及び社会発展統計公報
Source: China Statistical Yearbook Economic Statistics Communique for 1997

で低下した。

黒龍江省の同目標額は70億ドルであるが1997年の貿易総額は36億ドルで、伸び率1.9%と前年の水準を維持する程度に留まっている。形態別には一般貿易が伸び、全体の48.5%（前年は39.3%）を占めた。取引の決済方式は、伝統的なバーター取引から現金決済を中心とする方式へと移行してきている。1997年は現金取引が28億ドル（前年比16.2%増）、バーター取引が8億ドル（同▲28.8%）となり、前者が全体の77.7%を占めた。

以上の東北三省の貿易は対全国シェアでみると6.3%程度に留まっている。遼寧省の対全国シェアは4.6%となるのに対して、吉林省及び黒龍江省の貿易額が全国に占める割合はそれぞれ0.6%、1.1%と極端に小さい。貿易依存率についても、遼寧省の35.3%と比べ、吉林省は10.9%、黒龍江省は11.0%と低く、沿海の遼寧省と内陸の吉林省及び黒龍江省との格差が見受けられる。因みに中国の他地域の貿易依存率をみると、広東省（150.4%）、上海市（74.9%）などが高い。沿海部で省内生産額及び一人当たり所得が遼寧省と同程度の福建省の貿易依存率は53.2%である。また内陸部で吉林省及び黒龍江省と同規模経済の湖北省、山西省をみると、それぞれ7.7%、13.5%となっており、貿易依存率の低さは内陸部に共通の現象であることが分かる。

直接投資

1997年の直接投資を契約ベースでみると、設備輸入関税の免税撤廃や東南アジアの通貨下落などにより、前年比▲30.4%の510億ドルに落ち込んだ。一方、実行ベースは8.5%増の453億ドルであった。項目別には、農業の総合開発、インフラ、基幹産業、ハイテク産業に関連する投資が増加しており、地域別には、中、西部への投資の比重が更に高まった。

東北三省の外資導入は依然立ち後れている。この地域への直接投資額（実行ベース）は中国全体の7.2%であるが、その6割以上を遼寧省が占め、吉林省、黒龍江省へ流入する外資は少ないのが現状である。

遼寧省における契約ベースの直接投資は前年比▲1.5%であった。直接投資先は主に、冶金、機械、化工、電子、交通等の産業分野である。実行ベースでは22億ドルであり、前年比32.5%増と好調であった。吉林省の直接投資の契約額は前年比▲27.5%の5億ドルであり、実行ベースでは▲10.9%の4億ドルとなった。黒龍江省をみると、契約額は前年比▲15.9%の8億ドルと落ち込んだが、実行額は7億ドルで前年から34.0%と大きく增加了。

1998年の中国経済

1997年の中国経済はマクロ指標でみる限り、高成長・低インフレを実現するなど好調に推移したが、一方で多くの問題を抱えていることも事実である。これらの問題点は、朱鎔基新首相が今後の課題として述べた「1つの確保、3つの達成、5つの改革」²に集約される。

中国は1998年のマクロ規制の主要目標を①経済成長率8%、②固定資産投資の伸び率10%以上、③小売物価上昇率3%以下、消費者物価上昇率5%前後、④輸出入総額3,450億ドル、としている。

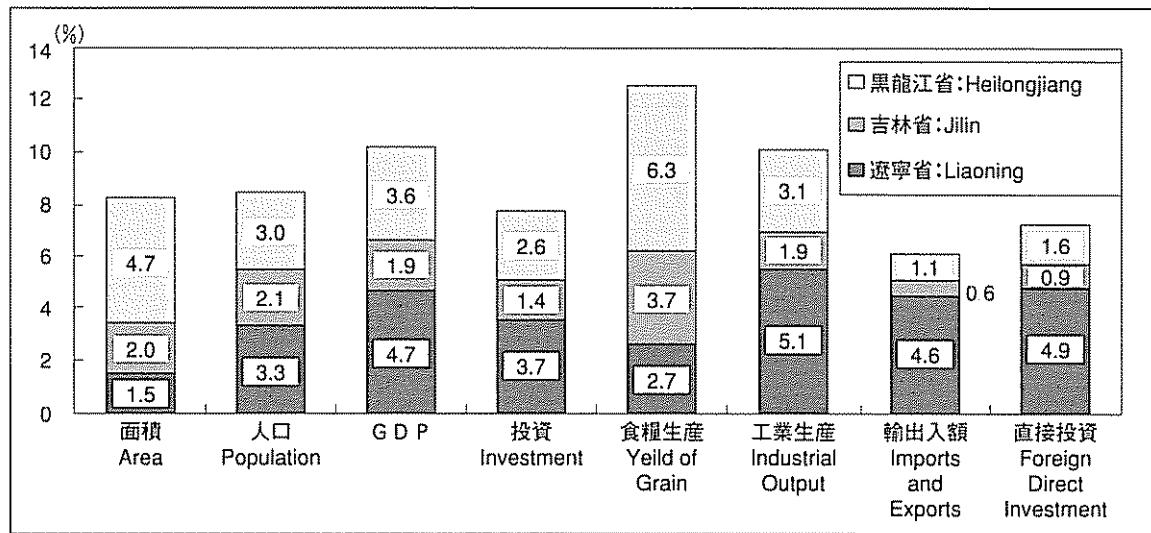
1998年前半を振り返ると、輸出の減少等に伴う工業生産の低下及び個人消費の低迷により上半期のGDP成長率は7.0%と年間の目標を下回った。貿易面でもアジア経済危機の影響が出ており、5月の輸出額は前年同月比▲1.5%で、1996年7月以来のマイナスとなった。上半期の輸出の伸びは7.6%、輸入は2.2%であり、総額では5.2%の伸び

率となっている。また、小売物価上昇率は▲2.1%で、月ベースでは9カ月連続の前年同月比割れとなり、デフレも懸念され始めている。

このように1998年前半の中国経済は減速感を強めつつあることから、中央政府は8%成長の目標達成のために道路・鉄道などのインフラ建設や住宅投資等の内需刺激策の実施を決定した。また、輸出の伸び悩みを受け、元切り下げへの圧力が高まる中、輸出競争力確保に向けて企業への増値（付加価値）税の還付率の引き上げを行った。

経済成長の鈍化は失業問題の悪化などをもたらし、状況によっては朱鎔基体制の足下を揺るがしかねない。8%成長確保のためにはこれら施策による景気回復が必須であり、人民元の切り下げ問題も含めて目が離せない状況がしばらく続くであろう。

(参考) 東北三省の全国に占めるウェイト比較
Reference: A Comparison of the Proportions of the Three Northeast Provinces in China as a Whole



² 「1つの確保」：経済成長率8%、物価上昇率3%以下を維持し、人民元の切り下げを回避
「3つの達成」：国有企业改革、金融体制改革、行政機構改革を3年内に達成
「5つの改革」：食糧流通体制、投融资システム、住宅、医療、財政税制の改革

全国及び東北三省の主要経済統計（1997年）
The Main Economic Statistics of China and Three Northeast Provinces(1997)

	全国 China		遼寧省 Liaoning		吉林省 Jilin		黒龍江省 Heilongjiang		
		伸び率 rate of increase		伸び率 roi		伸び率 roi		伸び率 roi	
国内総生産 (億元: 100mil RMB) Gross Domestic Product	74,772	8.8%	3,501	9.0%	1,450	9.5%	2,710	10.0%	
第一次産業 Primary Industry	13,969	3.5%	474	0.3%	375	▲0.6%	500	6.5%	
第二次産業 Secondary Industry	36,770	10.8%	1,737	10.4%	570	9.7%	1,460	10.3%	
鉱工業 Industry	31,752	11.1%	1,567	10.8%	497	10.7%	1,310	9.6%	
建設業 Construction	5,018	7.9%	170	6.8%	73	0.0%	150	15.7%	
第三次産業 Tertiary Industry	24,033	8.2%	1,290	10.3%	505	17.5%	750	12.1%	
運輸・通信業 Transportation and Telecommunications	4,526	10.7%	224	10.7%	106	21.1%	127	20.4%	
商業 Commerce	6,282	8.5%	444	n.a.	132	n.a.	218	n.a.	
一人当たりGDP Per Capita GDP	(元: RMB)	6,079	7.6%	8,519	8.3%	5,515	7.9%	7,246	n.a.
商品小売価格上昇率 General Retail Price			0.8%		1.0%		1.8%		2.2%
都市 Urban Areas			0.8%		1.0%		1.7%		2.0%
農村 Rural Areas			0.7%		0.5%		2.0%		2.6%
住民消費価格上昇率 Consumer Price			2.8%		3.1%		3.7%		4.4%
うち、都市 Urban Areas			3.1%		3.8%		3.7%		4.5%
農村 Rural Areas			2.5%		2.1%		3.7%		3.8%
うち、食品類 Food			▲0.1%		▲0.1%		1.3%		1.2%
食糧 Grain			▲8.9%		▲8.9%		▲6.5%		▲3.2%
肉類・肉製品 Meat			5.5%		9.1%		8.9%		7.9%
卵類 Eggs			▲20.7%		▲23.5%		▲30.9%		▲16.8%
水産品 Aquatic Products			0.2%		6.7%		8.0%		9.2%
生鮮野菜 Fresh Vegetables			0.0%		▲0.5%		1.5%		3.2%
衣料類 Clothing			3.0%		2.9%		3.3%		4.1%
家庭設備用品 Household Facilities and Articles			0.7%		1.2%		1.8%		1.4%
医療・保健用品 Medicine and Medical Articles			4.7%		3.7%		2.4%		5.1%
交通・通信用品 Means of Transportation and Communication			▲2.6%		▲2.6%		▲2.7%		▲2.2%
娯楽・教育・文化用品 Recreation, Education and Culture Articles			0.9%		2.4%		1.5%		3.4%
住居 Residence			8.3%		14.6%		10.6%		3.4%
サービス項目 Services			16.5%		14.1%		16.0%		19.2%
固定資産投資総額 (億元: 100mil RMB) Total Investment in Fixed Assets	25,300	10.1%	941	7.4%	351	▲11.0%	669	17.8%	
うち、国有企业 State-owned	13,419	11.3%	580	5.7%	294	▲8.8%	521	25.4%	
集団所有 Collective Owned	3,874	5.8%	97	▲5.6%	16	▲35.0%	23	▲15.0%	
住民個人 Individuals	3,427	6.7%	44	▲25.6%	41	▲18.9%	79	38.2%	
その他 Others	4,581	13.2%	220	33.2%	0	0.0%	46	▲13.6%	
うち、基本建設投資 Capital Construction	9,863	14.5%	396	17.9%	180	▲11.9%	342	53.3%	
更新改造投資 Innovation	3,870	6.8%	241	20.2%	58	▲7.9%	112	▲5.0%	
不動産投資 Real Estate Development	3,106	▲3.4%	136	0.6%	25	▲18.9%	45	▲6.9%	

	全国 China		遼寧省 Liaoning		吉林省 Jilin		黒龍江省 Heilongjiang	
		伸び率 rate of increase		伸び率 roi		伸び率 roi		伸び率 roi
主要農産品生産量 (万トン : 10thou tons) Yield of Farm Crops								
食糧 Grain	49,417	▲2.4%	1,314	▲20.9%	1,808	▲22.3%	3,105	1.9%
水稻 Rice	20,073	2.9%	389	6.1%	n/a	n/a	861	35.0%
小麦 Wheat	12,329	11.5%	n/a	n/a	n/a	n/a	328	▲0.3%
トウモロコシ Corn	10,431	▲18.2%	667	▲36.3%	n/a	n/a	1,166	▲10.0%
大豆 Beans	1,473	11.4%	35	▲19.4%	n/a	n/a	576	39.4%
いも類 Tubers	3,192	▲9.7%	n/a	n/a	n/a	n/a	81	▲17.9%
綿花 Cotton	460	9.5%	2	38.7%	n/a	n/a	n/a	n/a
油料作物 Oil-Bearing Crops	2,157	▲2.4%	16	▲5.4%	16	▲26.6%	18	8.4%
葉タバコ Tobacco	391	32.7%	5	2.3%	5	23.4%	16	▲3.8%
果物 Fruits	5,089	9.4%	264	6.5%	37	20.7%	16	7.1%
工業総生産(付加価値ベース) (億元 : 100mil RMB) Value Added of Total Industry	31,752	11.1%	3,652	10.1%	497	10.7%	1,310	9.6%
うち、国有企业 State-owned	9,894	5.4%	2,022	2.8%	250	▲2.3%	733	4.4%
集団所有 Collective Owned	11,875	11.7%	926	14.8%	73	3.9%	n/a	n/a
その他 Others	9,983	n/a	704	21.5%	56	18.9%	n/a	n/a
うち、軽工業 Light Industry	14,680	11.7%	833	8.0%	n/a	n/a	380	14.3%
重工業 Heavy Industry	17,072	10.5%	2,819	10.9%	n/a	n/a	930	7.8%
エネルギー総生産(SCE) (万トン : 10thou tons) Total Energy Production	133,600	0.7%	6,696	▲2.9%	n/a	n/a	14,346	1.7%
原炭 Coal	135,616	▲2.9%	5,862	▲3.0%	2,813	2.5%	8,392	4.6%
原油 Crude Oil	16,210	1.9%	1,504	0.0%	403	8.4%	5,602	0.0%
発電量 Electricity (億kwh : 10mil kwh)	11,045	2.1%	606	3.8%	292	▲6.9%	421	2.5%
天然ガス Natural Gas (億m³ : 100mil m³)	245	21.8%	n/a	n/a	n/a	n/a	23	0.8%
貨物輸送量 (億トンキロ : 100mil ton-km) Total Freight Traffic	38,182	4.7%	23,185	▲1.1%	632	2.2%	1,006	5.8%
鉄道 Railways	13,097	1.0%	13,173	▲1.4%	418	4.3%	801	6.2%
道路 Highways	5,270	5.2%	4,135	7.7%	78	▲0.3%	136	5.4%
水路 Waterways	19,207	7.5%	1,876	▲11.2%	1	2.8%	21	9.7%
空路 (民航) Civil Aviation	29	16.7%	5	58.8%	n/a	n/a	1	0.0%
パイプライン Petroleum and Gas Pipelines	579	▲1.0%	3,995	▲3.0%	135	▲2.0%	n/a	n/a
旅客輸送量 (億人キロ : 100mil passenger-km) Total Passenger Traffic	9,997	9.3%	23,741	▲3.9%	165	4.7%	337	20.4%
鉄道 Railways	3,548	6.7%	10,301	▲11.5%	106	2.6%	152	7.0%
道路 Highways	5,519	12.4%	12,838	3.0%	59	8.7%	173	37.3%
水路 Waterways	156	▲3.0%	390	▲4.7%	n/a	n/a	0	0.0%
空路 (民航) Civil Aviation	774	3.4%	211	7.6%	n/a	n/a	12	1.8%
主要港湾貨物取扱量 (万トン : 10thou tons) Volume of Freight Handled in Major Ports	90,519	6.3%	10,449	10.7%	n/a	n/a	n/a	n/a
社会消費財小売総額 (億元 : 100mil RMB) Total Retail Sales of Consumer Goods	26,843	10.2%	1,450	11.4%	620	10.3%	860	10.9%

	全国 China		遼寧省 Liaoning		吉林省 Jilin		黒龍江省 Heilongjiang	
		伸び率 rate of increase		伸び率 roi		伸び率 roi		伸び率 roi
輸出入総額 (億ドル: 100mil \$) Total Imports and Exports	3,251	12.1%	149	6.3%	19	▲11.8%	36	1.9%
輸出額 Exports	1,827	20.9%	92	6.5%	9	▲18.5%	20	10.5%
輸入額 Imports	1,424	2.5%	58	5.9%	9	▲3.9%	16	▲7.4%
外資利用額 (億ドル: 100mil \$) Utilization of Foreign Capital	644	17.5%	31	28.6%	10	0.0%	10	10.8%
うち直接投資 Foreign Direct Investment	453	8.5%	22	32.5%	4	▲10.9%	7	34.0%
年末銀行預金残高 (億元: 100mil RMB) Deposits of National Banking System	82,390	18.6%	4,067	n/a	1,534	17.4%	2,410	22.8%
各種貸付残高 Loans of National Banking System	74,914	16.7%	4,182	n/a	2,175	16.0%	2,524	19.8%
年末通貨供給量 Money Supply M1	34,826	16.5%	—	—	—	—	—	—
M2	90,995	17.3%	—	—	—	—	—	—
外貨準備高 (億ドル: 100mil \$) Foreign Exchange Reserves	1,399	33.2%	—	—	—	—	—	—
年末総人口 (万人: 10thou persons) Total Population	123,626	1.0%	4,138	2.0%	2,628	1.9%	3,751	0.6%

出所：中国及び東北三省各省の1997年国民経済及び社会発展報告、「中国統計摘要」

注：網掛け部分

注1：遼寧省の工業生産額は郷以上に限る。また、付加価値ベースではなく生産額ベースである。形態別、業種別も同様。

注2：遼寧省の貨物輸送量はトンベース（単位：万トン）、旅客輸送量は人ベース（単位：万人）である。

注3：遼寧省及び吉林省の輸出入額は通関統計による数値である。

Source: Economic Statistics Communiqué for 1997. A Statistical Survey of China State Statistical Bureau China

Notes for Shaded cells:

Note 1: The industrial production of Liaoning Province is above the township level, and not value added. This applies also to classification by types and industrial classification.

Note 2: The amount of freight transportation of Liaoning Province is by tons and the unit is 10 thousand tons. Passenger transportation is by the number of persons and the unit is 10 thousand persons.

Note 3: The import and export amounts of Liaoning and Jilin Provinces are from customs statistics

経済交流部だより

中国吉林省地域総合計画調査の概要と開発・投資セミナー

ERINA経済交流部 部長代理 中村 俊彦

1 セミナー開催の経緯と内容

吉林省地域総合開発計画にかかる開発調査は、中国の要請に基づき、国際協力事業団（JICA）が実施したもので、事業団は平成8年9月から平成9年12月までの間、財團法人国際開発センター（IDCJ） 藤田仁一郎氏を団長とする調査団を現地に派遣した。その最終報告にあたり、吉林省は同センターを通して国連工業開発機関（UNIDO）に開発・投資セミナーを要請し、今回の開催となった。

東京、名古屋でのセミナーとともに、新潟開催の打診を受けたERINAでは、新潟での共催を受諾するとともに、新潟県上越市、石川県金沢市において、この開発・投資セミナーをテーマとするERINA地域セミナーを独自で実施することとし、計5回のセミナーが日本各地で開催された。

各地でのセミナーは、

- 吉林省の投資環境と投資重点分野

吉林省副省長 王 国 発氏

- 吉林省の開発ポテンシャルと開発戦略

IDCJ理事長 藤田仁一郎氏

- 吉林省重点プロジェクトの紹介

吉林省計画委員会副主任 賈 広 和氏
を共通プログラムとし、

図們江地域開発投資プロジェクトの紹介

延辺州委員会副州長 金 振 吉氏（新潟）

- 吉林市投資プロジェクトの紹介

吉林市人民政府副市長 王 慶 新氏（金沢）

中国吉林省開発・投資セミナー



・長春市投資プロジェクトの紹介

長春市人民政府副市長 田 中 林氏（名古屋）
を3会場に配分して行われた。

2 2010年への開発計画調査報告

□日本政府による四つ目の対中国・地域開発計画

新潟など日本海側地域においては、図們江地域開発などで特に交流の盛んな吉林省であるが、今回のセミナーは、こうした地域交流をより広範なフレームの中で考える機会ともなった。

JICAによれば、中国における地域開発計画策定は、88年の海南島総合計画、93年の上海浦東新区高橋地区、94年の九江市総合開発に次いで四つ目となる。さらにIDCJによると、中国政府の国家計画委員会が加わった調査は始めてとのこと。吉林省既存の食糧生産力と重工業の集積という比較優位性を活かしながら、各々が市場経済に適応し国際競争力を保つため、農業の高付加価値生産、工場再編の推進など、構造転換に論及する踏み込んだ報告となっている。調査対象地域を長春・吉林経済圏と延辺経済圏の2つの経済圏に区分認識したうえで、2010年に向けての開発戦略を提唱している。

□8つのマスター・プランと18のコア・プログラム

以上のように、全体計画の枠組みは、「地域経済構造を転換すること」によって、「（計画経済の名残が強く閉鎖的な）東北現象を打破すること」を目標とする。最終報告書は8つのマスター・プランで構成され、計画目標の実現に向けて省政府が主導的な役割を果たすべき事柄のうち、特に重要な18のコア・プログラムを選定した。

[マスター・プラン] 総合開発／農業・水資源／産業（含エネルギー）／観光開発／交通／通信／都市・土地利用／環境

[コア・プログラム] 農村集団経済組織／畜産（肉牛）総合振興／長春野菜卸売市場改善／水資源開発／森林の持つ公益的機能の受益者負担／木材加工産業振興／農産加工・食品産業振興／自動車・機械部品産業構造改革・強

化促進／老朽産業再編・活性化推進／電子・ハイテク産業振興／延辺地域産業振興／延辺小水力開発促進計画／長白山・延吉総合観光開発／東西軸幹線道路整備／農村フィーダー交通網計画／物流ターミナル整備計画／地方経済開発区見直し／老朽化住宅地区再開発

3 ザルビノ鉄道について

セミナーではこれらの開発計画とともに、前述のよう

に吉林省の重点投資案件や長春・吉林・延辺の投資促進の呼びかけがなされ、また各地での港湾視察や表敬訪問など、精力的な訪日活動が展開された。特に、新潟県本間出納長への表敬訪問の際に王副省長は、懸案の「琿春-マハリノ（クラスキノ）鉄道」について、中日合意の営業開始日が7月1日から8月12日に延期された事実に触れるとともに、セミナーでは「8月中、あるいは年内になるのでは」と含みを残し、注目された。

『ロシア極東ザバイカル地域長期発展プログラム』 (日本語版) 発刊のご案内

この度、「ロシア極東ザバイカル地域長期発展プログラム（ロシア経済省、ロシア極東ザバイカル協会作成）」が、ERINA翻訳・編集、大蔵省印刷局発行により出版されました。

このプログラムは、ロシア極東地域の今後の発展の基盤となるもので、ロシア連邦の大統領プログラムとして承認を得ています。そして、この地域の政策やプロジェクトが包括的にまとめられており、地方レベルの開発計画ではなく、国家的なプログラムとしての位置づけを持っているという特色があります。

(目次)

- 第1章 極東ザバイカル地域の長期的な社会経済発展構想
- 第2章 極東ザバイカル地域全体に重要な緊急国家支援
- 第3章 サブプログラム
「極東ザバイカル地域の経済構造改革」
- 第4章 サブプログラム
「極東ザバイカル地域における雇用の支援と人口の定着化」
- 第5章 サブプログラム
「アジア太平洋諸国との経済協力による
極東ザバイカル地域の世界経済への参入」
- 第6章 プログラム実施の運営管理

購入方法

最寄りの政府刊行物サービスセンター、官報販売所または官報取扱書店でお求め下さい。



(財)環日本海経済研究所 編
大蔵省印刷局 発行
A4版 本体価格1,700円（税別）

研究所だより

1. 会議の開催

平成10年度第1回理事会・評議員会（平成10年6月18日
オークラホテル新潟）

2. 平成9年度決算の概要

<取支計算書>

項目	金額(円)
当期収入合計	364,599,721
当期支出合計	354,453,625
当期収支差額	10,146,096
前期繰越収支差額	15,708,678
次期繰越収支差額	25,854,774

<貸借対照表>

I 資産の部

項目	金額(円)
流動資産	83,271,922
固定資産	3,570,135,064
資産合計	3,653,406,986

II 負債の部

項目	金額(円)
流動負債	57,417,148
固定負債	10,236,846
負債合計	67,653,994

III 正味財産の部

項目	金額(円)
正味財産	3,585,752,992
(うち基本金)	(3,545,000,000)
(うち当期正味財産増加額)	(81,362,041)
負債及び正味財産合計	3,653,406,986

3. 理事・評議員の異動

<辞任>

理事 羽倉 信也 前 (社)日韓経済協会会长
武藤 輝一 前 新潟大学学長
河毛 二郎 前 日本ロシア経済委員会委員長
評議員 萩野周次郎 前 上越商工会議所会頭
松藤 哲夫 前 北海道東北開発公庫理事
高橋 清 前 昭和シェル石油(株)顧問
吉沢 慎一 前 新潟県中小企業団体中央会会长
浜本 敏孝 前 大阪商船三井船舶常勤監査役

<就任>

理事 藤村 正哉	(社)日韓経済協会会长
荒川 正昭	新潟大学学長
安西 邦夫	日本ロシア経済委員会委員長
評議員 田中 弘邦	上越商工会議所会頭
佐瀬 正敬	北海道東北開発公庫理事
本間 広志	新潟県中小企業団体中央会会长
中村 清次	大阪商船三井船舶(株)
代表取締役 専務取締役	

4. 事務局職員の異動

(1) 平成10年3月31日付け

<転出>
経済交流部 部長代理 駒形 正明
(株)テレビ新潟放送網へ)
調査研究部 研究主任 田中 仁
(株)第四銀行へ)
研究員 西片 一喜 (新潟県へ)

(2) 平成10年4月1日付け

<採用>
調査研究部長 伊藤 征一
経済交流部 部長代理 中村 俊彦
<転入>
調査研究部 研究員 篠宮 宏明
(株)第四銀行から)
調査研究部 研究員 高橋 洋一 (新潟県から)

5. セミナーの開催

▽第2回賛助会セミナー▽

平成10年5月20日(水)新潟グランドホテル(新潟市)において、「朱鎔基中国新首相の経済政策－中国での実務体験を交えて－」をテーマに開催。

・講師：日商岩井株式会社

国際統轄部 参事 田中 郁三氏

▽第3回賛助会セミナー▽

平成10年6月19日(金)新潟グランドホテル(新潟市)において、「朝鮮半島情勢の現状と課題－主として日本の安全保障の観点から－」をテーマに開催。

・講師：防衛庁防衛研究所

第二研究部第三研究室長 武貞 秀士氏

▽中国吉林省開発・投資セミナー▽

平成10年6月22日(月)万代シルバーホテル(新潟市)において、ODAによる吉林省総合開発計画調査を踏まえて開催。

・講師：吉林省 常務副省長 王 国 発氏
 朝鮮国際開発センター 理事長 蔡田仁一郎氏
 吉林省 計画委員会 副主任 贾 広 和氏
 ほか

・共催：国際連合工業開発機関東京投資促進事務所

財團法人国際開発センター

▽地域セミナー▽

①平成10年5月29日（金）ホテルロイヤル盛岡（盛岡市）において、「新外為法下の実務とビジネスチャンス」をテーマに開催。

・講師：株東銀リサーチインターナショナル

東京貿易相談所 所長 浦野 直義氏

・共催：日本貿易振興会（ジェトロ）盛岡貿易情報センター

②平成10年6月23日（火）ホテルセンチュリーイカヤ（上越市）において、「中国吉林省開発・投資セミナー」として開催。

・講師：吉林省 常務副省長 王 国 発氏

朝鮮国際開発センター 理事長 蔡田仁一郎氏

延辺州委員会 副委員長 金 振 吉氏

ほか

③平成10年6月24日（水）石川県国際交流センター（金沢市）において、「中国吉林省開発・投資セミナー」として開催。

・講師：吉林省 常務副省長 王 国 発氏

朝鮮国際開発センター 理事長 蔡田仁一郎氏

吉林市人民政府 副市長 王 慶 新氏

ほか

▽第4回賛助会セミナー▽

平成10年7月15日（水）新潟グランドホテル（新潟市）において開催。

1講 演：(社)日本港湾協会理事長、ERINA参与

柏原 英郎氏

「日本海大交流時代を語る

—新潟に寄せる期待と課題—」

2研究発表：ERINA副理事長・所長 宮戸 駿太郎

「21世紀の北東アジア—2025年の所得水準と

経済規模：マクロフレームワーク試算—」

編集後記

6月22日に中国吉林省の王国發副省長一行が新潟県内を訪問した際、「ザルビノ鉄道は8月中か、（遅くとも）年内には開通するだろう」と発言されました。ザルビノ

鉄道は団們江地域開発のシンボル的存在と言わされてきましたが、これまでに何度も開通が延期され、関係者をがっかりさせました。今度こそは期待したいものです。一番列車が走った暁には、どの様な貨物が運ばれるのでしょうか。

ロシアが深刻な経済・金融危機に見舞われています。今年のプラス成長はまず望めず、国民の間にも失望感が急速に広まっています。社会主义から市場経済への移行期という難しい状況に置かれ、また日ロ間の貿易や交流もまだまだ少ないので、何とか頑張ってもらいたいものです。今号ではロシアの経済状況と、極東ロシアと日本の協力に関する2つの報告が届いています。

一方、韓国はIMFの管理下に入って半年が経過しました。今年5月までの半年間で中小企業を中心に1日平均100社程が倒産に追い込まれ、失業者の急増など国民生活は予想を遥かに超えた厳しいものとなっています。今後は、大規模な構造調整を迎へ、経済回復のための正念場となるでしょう。南北朝鮮はともに経済困難に陥っていますが、双方が協力できるような新しい方向も見つけ出してもらいたいものです。

北東アジア各国は、日本を含めて、経済的には苦しい状況が続いています。しかし、暗いことばかりを考えずに、明るいことを探し、互いに協力してこの地域の発展に繋げていきたいものです。

(W)

編集・発行 財團法人 環日本海経済研究所©

Economic Research Institute for
Northeast Asia (ERINA)

〒951-8068 新潟市上大川前通6番町1178番地1

日本生命恵谷小路ビル6階
Nihonseimei Masayakoji Bldg 6 F,
6-1178-1 Kamiokawamae-dori,
Niigata 951-8068, JAPAN

T E L 025-222-3141 (代表)

025-222-3636 (調査研究部)

025-222-3150 (経済交流部)

F A X 025-222-9505

E-MAIL

webmaster@po.erina.or.jp

ホームページアドレス (U R L)

<http://www.erina.or.jp>

発行日 1998年8月15日

(お願い)

ERINA REPORT送付先の住所、氏名などが変更になりましたら、上記までご連絡下さい。

禁無断転載